人口減少時代の 新しい地域づくりに資する 社会教育事業に関する調査研究

~住民の主体的な地域づくりを進めるプロセス・手段とその評価の検証~

令和5年3月 北海道立生涯学習推進センター

はじめに

本道においては、全国を上回るスピードで人口減少が進んでいるほか、生産年齢人口 が減るとともに高齢者人口と年少人口が逆転するなど、少子高齢化が大きく進行してい ます。

また、社会生活を一変させた新型コロナウイルス感染拡大は、地域での社会教育活動にも大きな影響を及ぼすとともに、孤独や孤立といった問題が顕在化し、深刻化させる契機にもなったと言われております。

このような中、持続可能で安心・安全に暮らせる社会や孤立しがちな若者や高齢の方などを支え合う社会を実現していくためには、生涯学習や社会教育の役割が重要とされており、様々な課題が山積する中、地域が持つ教育機能を活かし、より多くの住民の主体的な参加を得られるような取組の工夫が一層必要となっております。

こうしたことから、道立生涯学習推進センターでは、地域の課題解決を目指す住民参画型の事業「ほっかいどう学地方創生塾」を実施し、地域の特性を活かしたプロセス・手段とその成果を発信することで、各市町村において住民が主体となる多様な取組の展開に寄与することを目的に、調査研究を行いました。

本調査研究は、令和元年度(2019年度)から令和4年度(2022年度)の4ヵ年で実施した調査研究の最終報告です。

本報告書が市町村をはじめ、多くの社会教育関係者の皆さまに活用され、今後の地域課題を扱った社会教育事業を企画する際の一助となれば幸いです。

結びに、本調査研究の実施及び報告書の作成に当たり、御支援・御協力をいただきました自治体の関係者をはじめ、多くの皆さまに心から厚く御礼申し上げます。

北海道立生涯学習推進センター所長 桑原 知己

目 次

はじめに

第1章 調査研究の概要	1
1 調査研究の目的	3 - 3 3 6
第2章 住民の課題意識と学習機会に係る実態	9
1 調査の目的	- 11 - 11 - 12 - 12 - 12 - 13 - 15 - 17 - 18 - 20
第3章 実践事例報告	23
1 網走市(オホーツク管内) 2 伊達市(胆振管内)	- 25 - 32

笠 /1	章 モデル事業	41
布 4	早、モノル争未	41
1	鷹栖町(上川管内)	43
2	芦別市(空知管内)	57
3	成果と課題	69
	(1) 鷹栖町のモデル事業	69
	(2) 芦別市のモデル事業	69
第5	章 モデル発展実践事業	71
1	芦別市における事業の概要	73
2	事業の実施概要	75
3	調査の方法	90
4	調査の結果	92
5	成果と課題	95
資	料 N	97
1	令和4年度生涯学習推進体制の整備状況調査票	99
2	令和4年度生涯学習に関する住民の意識調査票	101
3	ほっかいどう学地方創生塾実施要領	107
4	令和2年度ほっかいどう学地方創生塾開催要項	119
5	令和3年度ほっかいどう学地方創生塾開催要項	110
6	令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事前アンケート用紙(鷹栖町)	111
7	令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート用紙(鷹栖町)	112
8	令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事前アンケート用紙(芦別市)	113
9	令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート用紙(芦別市)	114
10	令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート用紙(参加者用)	115
11	令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート用紙(担当者用)	116
12	令和3年度ほっかいどう学地方創生塾アンケート用紙	117

第1章 調査研究の概要

- 1 調査の目的
- 2 調査の計画
- 3 調査の内容
- 4 調査研究の方法等

第1章 調査研究の概要

1 調査研究の目的

本道においては、全国を上回る速さで少子高齢化や人口減少が進み、様々な課題が山積する中、 地域が持つ教育機能を活かし、より多くの住民の主体的な参加を得られるような取組の工夫が一 層必要となっている。

こうしたことから、新たな地域づくりを進めるための効果的なプロセス・手法を導き出し、その成果を発信することで、各市町村において住民が主体となる多様な取組の展開に寄与することを目的に実施する。

2 調査研究の計画

本研究は、令和元年度(2019年度)から令和4年度(2022年度)の4ヵ年で実施した調査研究の最終報告である。

(1) 令和元年度(2019年度):実態調査・事例研究(聞き取り調査・視察)

1年次にあたる令和元年度(2019年度)において、道内全市町村を対象に地域の課題解決を目指す住民参画型事業の実施状況に関するアンケート調査を実施し、事業実施上の成果と課題、地域の実情やニーズについて把握した。その上で、地域の課題解決を目指す住民参画型事業の立ち上げや地域性との関係等について、道内外の自治体を対象に聞き取り調査や視察を実施し、「資料編」として調査研究報告書(第43号)を作成した。

(2) 令和2年度(2020年度):パイロット事業の実施・検証

2年次にあたる令和2年度(2020年度)においては、1年次の調査研究の結果を踏まえ、パイロット事業「ほっかいどう学地方創生塾」を道内4市町で実施し、課題解決を目指す住民参画型事業の実証開発を行い、プロセス・手段とその評価について検証を行った。

(3) 令和3年度(2021年度)~令和4年度(2022年度):モデル事業の実施・検証

令和3年度(2021年度)と令和4年度(2022年度)においては、2年次の実証研究の成果を踏まえ、パイロット事業を実施した自治体から2つの市町を選択してモデル事業を実施し、地域の特性を活かしたプロセス・手段とその成果を計る評価方法をもとに、課題解決を目指す住民参画型事業の検証を行い、成果と課題を明らかにした。

調査研究の構造

テーマ

人口減少時代の新しい地域づくりに資する社会教育事業に関する調査研究 ~住民の主体的な地域づくりを進めるプロセス・手段とその評価の検証~

問題と目的

本道においては、全国を上回る速さで少子高齢化や人口減少が進み、様々な課題が山積する中、地域が持つ教育機能を活かし、より多くの住民の主体的な参加を得られるような取組の工夫が一層必要となっている。

こうしたことから、新たな地域づくりを進めるための効果的なプロセス・手法を導き出し、その成果を発信することで、各市町村において住民が主体となる多様な取組の展開に寄与することを目的に実施する。

研究計画·方法

◆実態調査

- ○道内全市町村を対象にアンケー ト調査を実施
- ・地域の課題解決を目指す住民参 画型事業の実施状況



・事業実施上の成果と課題、地域の 実情やニーズの把握

◆事例研究(聞き取り・視察)

- ○地域の課題解決を目指す住民参画型事業について、立ち上げや地域性との関係等について調査 【方法】
- ・道内外の先進事例を収集
- ・過去の調査研究報告書等から事 例を収集 ____
- 事業を組み立てる上で重視する 点等、効果的なプロセス・手法の 整理

◆モデル事業の実施

〇モデル事業「地方創生塾」を道内 2市町(芦別市・鷹栖町)で実施 し、地域の特性を活かしたプロ セス・手段とその成果を計る評 価方法をもとに、課題解決を目 指す住民参画型事業の実証開発 を行う。

【方法】

- ・モデル事業の企画と実施
- ・事業参加者の変容調査
- ・事業担当者の振り返りシートの 整理
- ・事業実施報告書の作成



- ・センター職員、事業担当者、塾長 が連携し、塾生との関わり方や 運営方法について整理
- ・多様な主体との連携・協働
- ・事業展開・評価の在り方を検討

◆モデル事業の検証

○道内2市町(芦別市・鷹栖町)に おいて実施したモデル事業「地 方創生塾」の検証を行い、成果と 課題を明らかにする。

【方法】

- ・事業参加者の意識やスキルなど の変容調査及び分析
- ・事業担当者の意識の変容調査及び分析
- ・プロセス及び手法、その評価の検証



- ・成果をモデルプランの提示に留 めず、実践によって検証
- ・社会教育の基盤整備と多様な資金調達手法について検証
- ・事業のプロセスや手段の視点の もと事業展開・評価の検証
- ・事業の成果と課題の整理

考察

モデルの提示

- ○多くの社会教育行政で活用可能なモデルプログラムを提示
- ・地域づくりや社会参画に関する調査研究を手がかりに、実施 したモデル事業の成果を明らかにする。
- ・多様な主体との連携・協働の在り方
- ・持続可能な取組に向けた仕組みづくり
- ・多様な資金調達の手法
- ・地域の特性を活かしたプロセス・手段 等

結果の公表

- ○モデルプログラムの普及
- ・調査研究報告書の発行 (令和5年3月予定)
- ・調査報告書のホームページへの掲載
- ・調査報告書の道内市町村、関係団体等への送付
- ・社会教育セミナー等での成果発表

期待される効果

本調査研究の成果が糸口となり、各市町村において住民が主体となる地域づくりに向けた様々な取組が展開される

年次	段階		内容
		質問紙調査	○ 道内 179 市町村を対象とした調査の実施 ・地域課題解決を目指す住民参画型事業の実施状況 ・事業実施上の成果と課題 ・道に期待する役割 等
1 年 次	実態把握	聞き取り 調査	○ 道内6市町における実践事例 ・地域課題解決を目指す住民参画型事業の概要 ・事業を実施する上で重視している点と困難な点 等
		視察	道内外の視察 「地方創生塾〜高校生による地域活性化に向けたイベントの企画」(網走市) 「ビジョンづくりを通した住民の主体的な地域づくり」(広島県三次市川西地区)
2 年 次	仮説の 設定	モデル プログラム の開発 1	○ モデル事業の企画・道内2市町(芦別市・鷹栖町)における事業の企画・高校生の活動の場の設定・高校生視点での新たな取組の企画立案・事業参加者の変容調査・事業担当者の振り返り
3年次	仮説の 再構築	モデル プログラム の開発 2	○ モデル事業の実践(2年次の取組を踏まえて) ・道内2市町(芦別市・鷹栖町)における事業の企画・実践 ・学びへの参加のきっかけづくり(高校生の社会参画) ・多様な人材の幅広い活躍の促進(事業企画者、コーディネーターの関わり) ・多様な主体との連携・協働の推進(ネットワーク型行政) ・社会教育の基盤整備と多様な資金調達手法の検討 (事業費調達の仕組みづくり)
		モデル事業 の検証	 ○ モデル事業の検証 ・道内2市町(芦別市・鷹栖町)における事業の検証 ・高校生の社会参画意識等の変容 ・多様な人材の幅広い活躍による成果(事業企画者、コーディネーターの育成) ・多様な主体との連携・協働の成果(ネットワーク型行政の実質化) ・社会教育の基盤整備と多様な資金調達手法の活用等 (芦別市:ふるさと納税を活用した事業費調達の仕組みづくり)
4 年 次	仮説の 検証・ 調査 報告書	調査結果の 分析	○ 調査結果の分析 ・地域課題解決を目指す取組を妨げる要因 ・平成 20 年度実施アンケートとの比較 ・生涯学習に関する住民の意識調査とのクロス集計 等
		モデル プログラム の提示	○ モデルプログラムの提示 ・地域づくりや社会参画に関する調査研究を手がかりに、モデル事業の 成果を明らかにする ・多くの社会教育行政で活用可能なモデルプログラムを提示
		結果の公表	○ 調査研究の結果の公表・調査報告書(冊子)の作成・ホームページへの掲載・道内市町村、関係団体等への送付

3 調査研究の対象

(1) 実態把握のための調査(質問紙調査)

道内 179 市町村の教育委員会事務局を対象とした。

(2) 実践事例報告

- 1 網走市 (オホーツク管内)
- 2 伊達市大滝区(胆振管内)

(3) モデル事業

- 1 鷹栖町(上川管内)
- 2 芦別市 (空知管内)

4 調査研究の方法等

- (1) 質問紙調査(住民の課題意識と学習機会に係る実態)
- ア 調査票の配付

北海道立生涯学習推進センターから、教育委員会事務局(道内 179 市町村)に電子メールで配付した。

- イ 調査票の回収
- ウ 調査の実施時期
- エ 調査の期間
- 才 実施主体

北海道立生涯学習推進センター

カ 調査の回収状況

(2) 実践事例報告

課題解決を目指す住民参画型の事業の実証開発を行い、プロセス・手段とその評価について 検証を行った。実施した市町に実施報告書を提出してもらった。

(3) モデル事業

住民が主体となる地域づくりを進めていくためには、住民自らが地域の課題や未来像を共有し、学びの成果を実感しながら、地域課題の発見から解決に至るまで共通理解の中で活動に取り組んでいくプロセスが重要である。

2年次の実践事例の中から、2市町を対象に、1年次の調査における質問紙調査、聞き取り 調査等により導き出された重要な視点を組み込んだモデル事業の開発を行い、その効果を検証 した。 検証内容と方法については、市町職員や塾長の参加者への関わり方、事業の運営方法等について整理するとともに、下記のプロセスや手段の視点で行った。

視点1 聞き取り調査等による地域の実情やニーズの把握

地域づくりにより、解決しなければならない課題は地域によって異なり、複雑である。例えば、高齢化が進んでいる地域であっても、町内会活動等で地域住民の横の繋がりが強い地域と都市部など隣近所の交流が少ない地域、市町村中心部とその周辺に点在している小さな集落など、地域の人口や年齢比率、立地条件が異なると様々な要素が複雑に絡み合っている場合がある。こうしたことから、地域の現状や課題は丁寧に分析し、地域の実情やニーズを把握するための調査を進めていく必要がある。

[調査例]

- ○現地調査・・まち歩き、まち探検などの実地踏査や写真を使った学習
- ○二一ズ調査・・アンケート、ヒアリングなどにより住民の声を直接聞く
- ○統計調査の収集と分析・・国勢調査、消費動向調査等により地域分析

視点2 事業に関わる人との方向性の共有

地域づくりは町内会、自治会、社会教育関係団体、学校関係者等、様々な考えや人間関係が 混在して成立している。こうしたことから、自分の学習と互いの学習を最大限に高め、多様 性を重視しながら考え方を追求する協働学習の技法等を取り入れ、丁寧にベクトルを合わせ ていくなどの工夫が必要である。

視点3 継続性のある取組とするための工夫

住民が主体となった地域づくりを継続していくためには、毎回の学習の中で丁寧な振り返りを位置づけていく必要がある。振り返りシートやアンケートの他に、途中でこれまでの取組を振り返るなど、学びを丁寧に咀嚼し、次にどのような展望があるかを発見していくプロセスを意図的に組み込むことで、住民が自らの学びや取組を分解することができ、他の場面でも経験を活かすことができるようになる。

視点4 テーマ設定の工夫

住民にとって身近で目的を共有しやすいテーマを設定し、それぞれが持つ知識や経験を出 し合い、楽しくやりがいを持って取り組めるようにすることが重要である。

第2章 住民の課題意識と学習機会に係る実態

- 1 調査の目的
- 2 調査の方法
- 3 調査の内容
- 4 調査の結果
- 5 過去の調査結果との比較

第2章 住民の課題意識と学習機会に係る実態

1 調査の目的

- ・ 道内の市町村における生涯学習の推進体制の整備状況や地域の課題解決を目指す取組についての実態を把握する。
- ・ 住民の生涯学習や今日的な課題に関する意識などについて、全道的な傾向を把握するととも に、経年変化の状況を把握する。
- ・ 住民の課題意識と自治体の学習機会についての調査結果をクロス集計し、生涯学習推進上の 課題を把握する。

2 調査の方法

令和2年度(2020年度)から令和4年度(2022年度)までの3ヵ年における道内の市町村における生涯学習推進体制の整備状況調査と生涯学習に関する住民の意識調査を行った。

(1) 生涯学習推進体制の整備状況調査

調査目的	道内の市町村における生涯学習の推進体制の整備状況の把握
調査主体	北海道立生涯学習推進センター
調査対象	北海道内 179 市町村教育委員会
抽出方法	全数調査
調査方法	調査票によるアンケート形式の自記式調査法(調査票調査)
調査基準日	令和3年 (2021年) 1月1日 令和3年 (2021年) 11月1日 令和4年 (2022年) 6月1日
調査期間	令和3年 (2021年) 2月24日~3月16日 令和3年 (2021年) 11月15日~令和4年 (2022年) 2月4日 令和4年 (2022年) 6月16日~8月17日
回収率	100%
集計方法	単純集計/Excel 使用

(2) 生涯学習に関する住民の意識調査

調査目的	住民の生涯学習や今日的な課題に関する意識などについて、基礎データを蓄積して、全道的な傾向を把握するとともに、経年変化の状況を把握し、分析することにより、新たな課題を見出し、今後の北海道並びに市町村の生涯学習及び社会教育の振興に寄与することを目的に実施
調査主体	北海道立生涯学習推進センター
調査対象	北海道内 178 市町村在住の住民(各市町村 7 名) = 1,246 人(札幌市を除く)
抽出方法	標本抽出法

	割当:各市町村の10歳代、20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳代、70歳以上の各年齢層から1名ずつ、男女比が均等となるよう対象者を選定
調査方法	調査票又はGoogle フォームによるアンケート形式の自記式調査法
調査期間	令和3年 (2021年) 2月24日~3月16日 令和3年 (2021年) 11月12日~12月9日 令和4年 (2022年) 11月12日~12月19日
回収率	令和 2 年度 有効回答者数=1,241 人 回収率=99.6% 令和 3 年度 有効回答者数=1,144 人 回収率=91.8% 令和 4 年度 有効回答者数=1,094 人 回収率=87.8%
集計方法	単純集計/Excel 使用

3 調査の内容

(1) 実態把握のための調査(質問紙調査)

道内 179 市町村の教育委員会事務局を対象とした。

4 調査の結果

(1) 各種構想・計画の状況

各種構想・計画の策定について、読書活動に関するものは、毎年 90%を超える割合で策定されており、次いで社会教育の推進に関するものは、毎年 87%を超える市町村が策定している(図 2-1)。

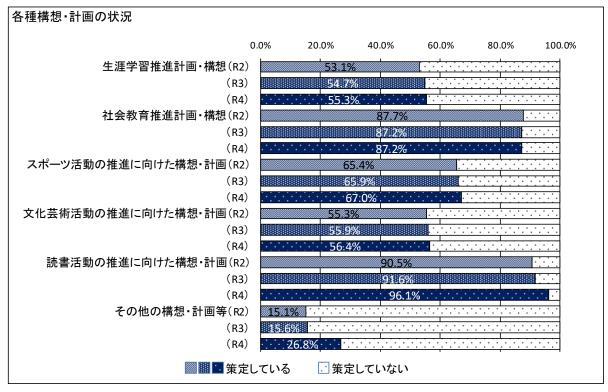


図 2-1 令和 2 年度~令和 4 年度における道内 179 市町村の各種構想・計画の状況

また、3ヵ年を比較すると、どの項目も大きな変化は見られず、経年変化についてはあまりない ことが明らかになった。

(2) 生涯学習推進上の課題

ア 令和2年度 (2022年度)

令和2年度(2020年度)における道内各市町村の生涯学習推進上の課題について、「極めて重要である」と「重要である」を合わせると、「住民の生涯学習に対する意識やニーズの把握」が98.9%と最も高く、次いで「住民に対する生涯学習の普及・啓発」が96.0%、「学校・家庭・地域の連携の促進」が93.9%、「生涯学習指導者やリーダー的人材の育成」が92.8%となっており、以上4つの課題について、道内の9割を超える市町村で重要な課題として認識されている(図2-2)。

また、「極めて重要である」との回答を見ると、「住民の生涯学習に対する意識やニーズの把握」 が44.7%と最も高く、次いで「学校・家庭・地域の連携の促進」が43.6%となっている。

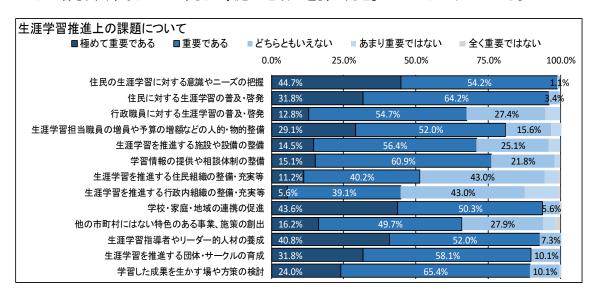


図 2-2 令和 2 年度(2020年度)における道内 178市町村の生涯学習推進上の課題

イ 令和3年度(2021年度)

令和3年度(2021年度)における道内各市町村の生涯学習推進上の課題について、「極めて重要である」と「重要である」を合わせると、「住民の生涯学習に対する意識やニーズの把握」が98.3%と最も高く、次いで「住民に対する生涯学習の普及・啓発」が95.0%、「学校・家庭・地域の連携の促進」が93.9%、「生涯学習指導者やリーダー的人材の育成」が92.2%となっており、以上4つの課題について、道内の9割を超える市町村で重要な課題として認識されている(図2-3)。

また、「極めて重要である」との回答を見ると、「住民の生涯学習に対する意識やニーズの把握」が49.2%と最も高く、次いで「学校・家庭・地域の連携の促進」が45.3%となっている。

これは、前年度とほぼ同様の傾向が見られる。

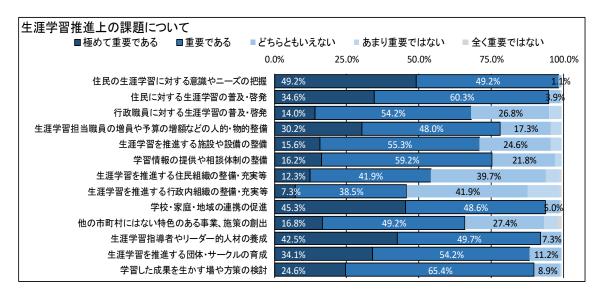


図 2-3 令和3年度(2021年度)における道内178市町村の生涯学習推進上の課題

ウ 令和4年度(2022年度)

令和4年度(2022年度)における道内各市町村の生涯学習推進上の課題について、「極めて重要である」と「重要である」を合わせると、「住民の生涯学習に対する意識やニーズの把握」が99.4%と最も高く、次いで「住民に対する生涯学習の普及・啓発」が96.1%、「学校・家庭・地域の連携の促進」が94.5%、「生涯学習指導者やリーダー的人材の育成」が92.6%、「学習した成果を活かす場や方策の検討」が90.0%となっており、以上5つの課題について、道内の9割を超える市町村で重要な課題として認識されており、いずれのテーマも前年度を上回る数値となっている(図2-4)。

また、「極めて重要である」との回答を見ると、「住民の生涯学習に対する意識やニーズの把握」が 50.8%と最も高く、次いで「学校・家庭・地域の連携の促進」が 45.3%となっており、3ヵ年において同様の傾向が見られる。

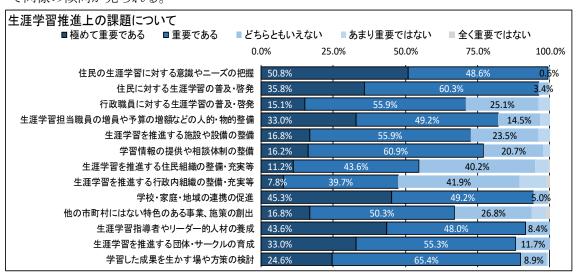


図 2-4 令和 4 年度 (2022 年度) における道内 178 市町村の生涯学習推進上の課題

工 考察

令和2年度(2020年度)から令和4年度(2022年度)の3ヵ年における調査の結果、「住民の生涯学習に対する意識やニーズの把握」、「住民に対する生涯学習の普及・啓発」、「学校・家庭・地域の連携の促進」、「生涯学習指導者やリーダー的人材の育成」の4つの課題について、道内の9割を超える市町村で重要な課題として認識されていることが明らかになった。

(3) 住民の課題意識と学習機会

ア 令和2年度 (2020年度)

図 2-5 は、令和 2 年度(2020 年度)における、住民の意識調査と学習機会の提供とのクロス集計の結果である。横軸が住民の課題意識で、縦軸が学習機会の提供に係る状況を示している。

テーマ別に見ると、「高齢化社会」、「防災」、「環境」、「食」、「安全・安心な生活」については、 住民の課題意識が高く、かつ、学習機会もある分野であり、「国際理解」については、学習機会は あるものの、住民の課題意識が低いテーマと言える。

また、「子どもの貧困」については、住民の課題意識が比較的高いものの、学習機会の提供状況が比較的少なく、「男女平等参画」については、住民の課題意識が比較的低く、学習機会の提供状況も低いテーマとなっている。

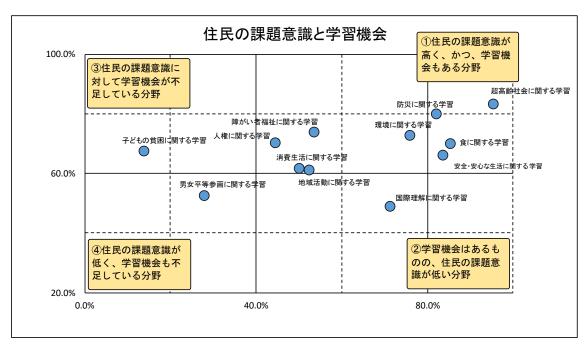


図 2-5 令和 2 年度(2020年度)における住民の課題意識と学習機会

イ 令和3年度 (2021年度)

令和3年度(2021年度)における、住民の意識調査と学習機会の提供とのクロス集計の結果について、テーマ別に見ると、「高齢化社会」、「防災」、「食」、「環境」、「安全・安心な生活」につい

ては、住民の課題意識が高く、かつ、学習機会もある分野であり、「国際理解」については、学習機会はあるものの、住民の課題意識が低いテーマと言える(図 2-6)。

また、「子どもの貧困」については、住民の課題意識が比較的高いものの、学習機会の提供状況が比較的少なく、「男女平等参画」については、住民の課題意識が比較的低く、学習機会の提供状況も低いテーマとなっており、前年度と同様の傾向が見られる。

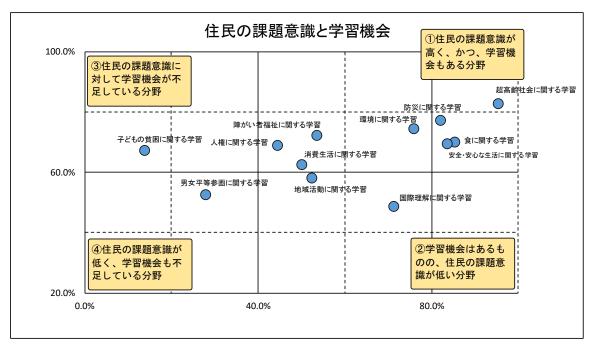


図 2-6 令和3年度(2021年度)における住民の課題意識と学習機会

ウ 令和4年度(2022年度)

令和4年度(2022年度)における、住民の意識調査と学習機会の提供とのクロス集計の結果について、テーマ別に見ると、「高齢化社会」、「防災」、「食」、「環境」、「安全・安心な生活」については、住民の課題意識が高く、かつ、学習機会もある分野であり、「国際理解」については、学習機会はあるものの、住民の課題意識が低いテーマと言える(図 2-7)。

また、「子どもの貧困」については、住民の課題意識が比較的高いものの、学習機会の提供状況が比較的少なく、「男女平等参画」については、住民の課題意識が比較的低く、学習機会の提供状況も低いテーマとなっており、この3ヵ年において同様の傾向が見られる。

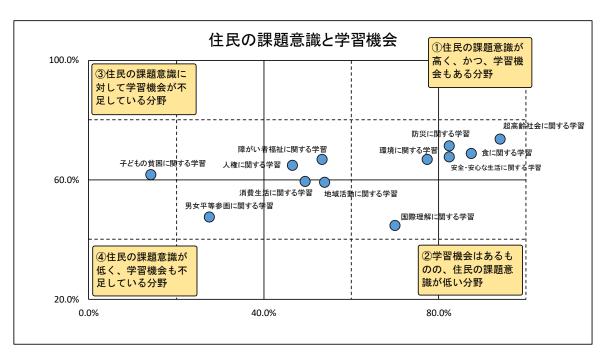


図 2-7 令和 4 年度(2022 年度)における住民の課題意識と学習機会

工 考察

令和2年度(2020年度)から令和4年度(2022年度)の3ヵ年における調査の結果、「高齢化社会」、「防災」、「食」、「環境」、「安全・安心な生活」については、3ヵ年共通として、住民の課題意識が高く、かつ、学習機会もある分野であるが、「国際理解」については、学習機会はあるものの、住民の課題意識が低いテーマであることがわかった。

一方、「子どもの貧困」については、住民の課題意識が比較的高いものの、学習機会の提供状況が比較的少なく、「男女平等参画」については、住民の課題意識が比較的低く、学習機会の提供状況も低いテーマとなっていることがわかった。

以上のことから、今後、住民の課題意識が高く、かつ、学習機会もある分野については継続して 取り組んでいく必要があり、住民の課題意識に対して学習機会が不足している分野については、 各市町村での手立てが急務である。

また、住民の課題意識が低い「子どもの貧困」などの分野については、課題意識が高まるようなアプローチが重要であり、「男女平等参画」など学習機会が不足している分野については、その提供について検討していく必要がある。

5 過去の調査結果との比較

(1)調査の目的

北海道立生涯学習推進センターでは、平成16年度(2004年度)より生涯学習に関する住民の意 識調査を行っているが、平成20年度(2008年度)には、地域での活動や地域課題に関する質問項 目を加えた。また、住民への質問に加えて市町村教育委員会職員(生涯学習・社会教育担当者)に ついても同内容の質問を行い、調査結果の比較・分析を行っている。

そこで、平成20年度(2008年度)調査(以下、H20調査)と令和4年度(2022年度)調査(以下、R4調査)を比較し、住民の課題意識と行政の課題意識及び学習機会の提供に係る状況について、どのような変化が見られるかを明らかにし、地域課題解決を目指す取組の参考にする。

(2) 平成20年度(2008年度)調査の概要

ア 調査の方法

調査目的	生涯学習の推進体制に焦点をあてた住民の意識や社会教育行政の実態
	を調査し、今後の生涯学習及び社会教育施策の基礎資料とする。
調査主体	北海道立生涯学習推進センター
調査対象	北海道内 180 市町村在住の成人(各市町村 6 名) = 1,080 人 北海道内 180 市町村教育委員会職員(生涯学習・社会教育担当者)
抽出方法	全数調査
調査方法	調査票によるアンケート形式の自記式調査法(調査票調査)
調査期間	平成 20 年 (2008 年) 10 月 24 日~11 月 28 日
回収率	北海道内市町村居住の成人 1,030 人(回収率 95.4%) 各市町村教育委員会職員 172 人(回収率 95.6%)

イ 調査の内容

地域課題に関する項目として、以下の質問を行い、当てはまるものを4つ選択してもらった。

- ア 少年に関すること (健全育成の成果があらわれていないなど)
- イ 青年に関すること(活動の機会が少ないなど)
- り 成人に関すること (モラルが低下しているなど)
- ェ 家庭に関すること (子育てで悩んでいる親が多いなど)
- オ 高齢者に関すること(団塊の世代、人材の活用など)
- カ ボランティアに関すること (学習機会、活動機会が不足しているなど)
- キ 健康・スポーツに関すること(健康づくり、スポーツ振興、地域医療の問題など)
- り 環境・自然に関すること(自然環境、環境問題など)
- ケ 産業に関すること(基幹産業の衰退、地域経済の低迷など)
- コ 安全・安心に関すること(防犯、防災、食の安全が心配など)
- サ 人口に関すること (過疎化や急激な人口増加の問題、少子化や高齢化など)
- シ 人や地域の関わりに関すること (コミュニケーション不足、関係が希薄であるなど)
- ス 地域の文化に関すること(担い手不足、文化振興など)
- セ 住民自治に関すること(住民の参画、住民と行政の担うべき役割が不明確であるなど)
- ソ その他

ウ 調査の結果

住民が地域課題として重要と考えるものは、「高齢者に関すること」、「産業に関すること」、「人口に関すること」という順であった(図 2-8)。北海道内の大多数の市町村において、高齢者の問題、基幹産業の衰退、地域経済の低迷など産業に関する課題と、過疎化、少子化や高齢化などの人口に関する課題が、最も重要な地域課題であることが示された。

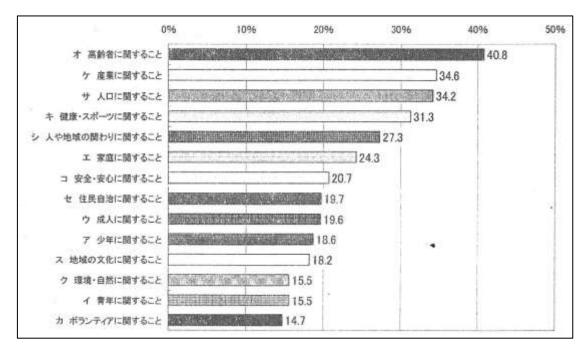


図 2-8 平成 20 年度 (2008 年度) における住民が重要と考える地域課題 (北海道立生涯学習推進センター研究報告書第 28 号『地域課題解決を目指す社会教育事業のあり方に関する調査研究』(平成 21 年 3 月) から)

図 2-9 は、住民の意識と行政職員の意識をクロス集計した結果である。横軸が「住民が重要と考える地域課題の順位(住民)」で、縦軸が「行政職員が重要と考える地域課題の順位(行政)」を示しており、バブルの大きさは、各項目の住民と行政職員との重要と考える数値の差を示している。「家庭」や「住民自治」、「高齢者」に関するものが、差が大きく示されている。

住民の意識と行政職員の重要度に開きがあるテーマは、「高齢者に関すること」、「安全・安心に関すること」である。また、「家庭」、「住民自治」、「高齢者」に関するテーマについては、住民も行政職員も重要度が高い地域課題である。

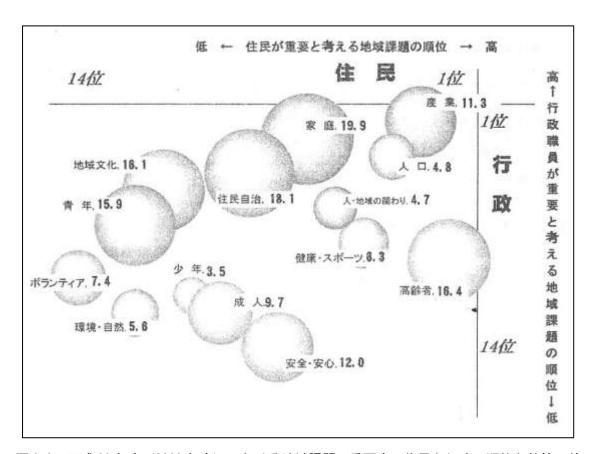


図 2-9 平成 20 年度(2008 年度)における地域課題の重要度・住民と行政の順位と数値の差 (北海道立生涯学習推進センター研究報告書第 28 号『地域課題解決を目指す社会教育事業のあり方 に関する調査研究』(平成 21 年 3 月)から)

(3)調査結果の比較

H20調査の結果(図 2-9)と R4調査(図 2-7)の結果を比較・分析したところ、いくつかのテーマにおいて、大きな変化など特徴が見られた。主な4つのテーマについて、その特徴を挙げる。

ア「高齢者」

H20 調査において住民の課題意識が最も高いテーマであるが、14年が経過した R4 調査においても同様に住民の意識が最も高くなっている。しかしながら、H20 調査における行政職員の意識はそれほど高くはなく、住民の意識との差が見られる。一方、R4 調査では行政による学習機会の提供状況が高くなっており、行政側の取組改善が見られる。

イ 「安全・安心」

H20 調査では、住民の意識はそれほど高くはなく、行政職員の意識においては、実施した調査項目の中で最も低い数値を示している。一方、R4 調査では、住民の意識が高い上、学習機会の提供状況も高い結果となっている。さらに、H20 調査の項目にはなかった「防災」についても、R4 調査

では住民の意識が高く、学習機会の提供状況も高い。平成23年(2011年)の東日本大震災以降、防災に関する課題意識の高まりと学習機会の提供が増えていることが要因の一つと考えられる。

ウ 「環境・自然」

H20 調査では、住民の意識も行政の意識も低い数値となっているが、R4 調査では逆に高い数値を示している。ESD や SDGs などの取組の推進により、自然環境や環境問題への課題意識が高まっていることが推察される。

エ 「地域活動に関する学習」

H20調査における「住民自治」と「人や地域の関わり」については、住民の意識よりも行政職員の意識の方が高く、特に「住民自治」については、その差に大きな開きが見られる。一方、R4調査を見ると、住民の意識と学習機会の提供状況に差はほとんど見られず、住民意識と学習機会の両方のバランスが取られている。

(4) 考察

地域課題の内容は、時代とともに変化し続けるものであるが、行政職員は、常に地域の課題や住民のニーズをしっかりと把握した上で、社会教育事業を計画し、多様な主体との連携・協働を推進しながら、課題解決を図る必要がある。そのためには、生涯学習に関する住民の意識や各市町村における生涯学習推進体制の整備状況に係る調査を通して、地域の課題解決を目指す取組についての実態を把握することが重要である。

また、地域の課題解決を図る上で、住民の主体的な参画による各地域の特性を活かした取組が求められており、課題解決を目指す住民参画型事業の事例を収集し、広く共有するとともに、活動の構想から評価に至るプロセスを分析したモデル事業を提示することにより、各市町村において住民が主体となる多様な取組の展開に寄与するものと考える。

第3章 実践事例報告

- 1 網走市 (オホーツク管内)
- 2 伊達市 (胆振管内)

第3章 実践事例報告

1 網走市 (オホーツク管内)

網走市は、北海道の東部に位置し、オホーツク海に面している。丘陵地が多く、市街地は網走川河口付近とその南側に続く海岸段丘上の平地にある。北西部に能取湖、中部に網走湖、東部に濤沸湖があり、内陸部は森や農村地帯が広がり、市域は「網走国定公園」の一部となっている。

令和4年12月末現在の人口は33,444人で、高齢人口率(65歳以上)は32.9%である。本道においては、全国を上回る速さで少子高齢化や人口減少が進み、様々な課題が山積する中、地域が持つ教育機能を活かし、より多くの住民の主体的な参加を得られるような取組の工夫が一層必要となっている。

(1) 実施目的

子ども向けイベントを企画したい又はボランティアとして参加したいという市民を対象に、子ども向けイベントについての学習や事業企画等について学ぶ機会を設け、参加者同士の連携を深め、目的をもった市民活動団体の組織化を通じて、コミュニティの活性化や市民活動の推進を図る。

(2) 実施主体

網走市市民環境部市民活動推進課

(3) 実施概要

講座名 子どもイベントキャラバン養成講座

ア 第1回(資料3-1)

実施日時	令和2年8月30日(日)10時00分~12時00分
会場	西コミュニティセンター 集会室
参加者	網走市民 31 名
講師	(一社) とちぎ市民協働研究会代表理事 廣瀬 隆人 氏
学習プログラム	○ 「まちの活性化と子ども事業」をテーマに、地域の現状や「子どもでつながる地域づくり」、「担い手育成としての子どもの体験事業」についての実践事例の紹介
	○ 「子どもイベントキャラバン」実施に向けた活動の進め方や参加者間の 連携、活動の継続に向けた工夫についてのアドバイス

イ 第2回(資料3-2)

実施日時	令和2年10月25日(日)10時00分~12時20分
会場	西コミュニティセンター 大集会室

参加者	網走市民 28 名
講師	(一社) とちぎ市民協働研究会代表理事 廣瀬 隆人 氏
学習プログ	○ 参加団体及び個人による自己紹介と活動内容の紹介
ラム	○ グループワーク①:団体に関わらず5~6名のグループに分かれて課題 解決型ワーク(おもしろ村)
	○ グループワーク②:子どもイベントキャラバンを実施するとしたらどのような役割やスケジュール感が必要となるかを「事務局」「時期」「対象」「方法」「調整」の5グループに分かれて協議・発表

ウ 第3回(資料3-3)

実施日時	令和3年2月21日(日)10時00分~12時00分
会場	向陽ヶ丘住民センター 多目的ホール
参加者	網走市民 26 名
講師	(一社) とちぎ市民協働研究会代表理事 廣瀬 隆人 氏 ※新型コロナウイルス感染防止のためオンラインによる講義
学習プログラム	○ 付箋を用いて「講座に参加した理由」「網走の子ども達に足りないものは何か」を各自記入し、キーワードを抽出。キーワードは事業実施時の事業目的となる。次に事業展開方法について、ブース方式によるイベント展開イメージを共有
	○ 実際にブース参加するメンバーごとにグループになり、どのようなブースを設置するか、スタッフ数、必要経費等を検討し発表。また、日時・場所、役割分担について全体で話し合いを行い決定○ 最後に講師より本講座の全体総括と次年度事業実施に向けたアドバイス

(4)事後調査

ア参加者

事業終了後、参加者を対象に、アンケート調査を実施し、以下の回答を得た。(n=22)

1 参加の動機について

項目	よく当て はまる	少し当て はまる	あまり当て はまらない	当てはま らない	未回答
まちのために活動したいと考えたから	13	8			1
仲間がほしかったから	5	7	5		5
周囲に誘われた・勧められたから	6	7	1	5	3
何かしたいと思ったから	8	8	2		4

2 地方創生塾を通して、「身についた」「向上した」「新たな気付きがあった」ことについて

項目	よく当て はまる	少し当て はまる	あまり当て はまらない	当てはま らない	未回答
自分の考えを的確に相手に伝えること	3	9	2	3	5

新たな人間関係をつくること	5	11	2	1	3
まちのことを考えること	10	7	2	1	2
まちのために活動する意欲	11	6	2	1	2
まちをより好きになったこと	3	11	2	1	5

3 今後の活動について

項目	思う	思わない	無回答
今後、この講座での学びを生かし、ま ちのために活動したいと思いますか	20		2

- 4 「思う」と回答した方は、どのようなことをしてみたいですか
- 地域防災、減災活動
- ・同じ思いの人と協調したいと思う
- コミュニティの向上
- ・網走はコンパクトに何でも揃っている街なのに、駒場付近の全国チェーンの企業ばかりが 栄えて、中心の商店街が淋しい状況
- ・もっと地元企業と市民とで暮らしやすい、子育てしやすい魅力的なまちづくりをしたい
- 子どもたちのために活動したい
- ・子供の笑顔のためになにかできればいいなと思います。こういう活動って楽しいよと関わったことのない大人たちに知って欲しい
- ・自分のしている活動(森のようちえん)とコラボして行えるものをやってみたい。例えば、 絵本劇を森の中でやっていただけたら、楽しいし子どもたちの学びになるなと思う
- ・今まで行ってきたことを生かしたい

イ 事業担当者

事業終了後、事業担当者を対象に、記述式のアンケート調査を実施し、以下の回答を得た。

1 今年度のプログラム全体(講座の回数も含む)について

講座回数は年3回とし、全国の事例や事業企画方法を学び、具体的にイベント実施に向けた話し合いに進めたため全体の流れや回数は適当だったと考えます。

申込者の約8割が全3回出席しており、最終回でとったアンケート結果でも内容についてよかったと答えた方が約8割と好評であり、<u>参加者にとっても無理なく出席できる回数、内</u>容だったと思われます。

2 学習者(参加者)間の関係づくり(コミュニケーションスキルの向上等)について

多様な職種、経験を持つ方が参加することで異業種交流が図られました。

また、普段から市民活動やボランティアなどの活動に親しんでいる方やこれから始めたい方など活動への取り組み状況もさまざまな方が集まることで<u>お互いに刺激</u>を与えることができたと思います。

3 他機関・団体等との連携について

他機関・団体等との連携は行いませんでした。

4 本事業を通した地域活性化について

今回学んだことを活かし、<u>新たな活動</u>を始めることや、<u>講座でできたつながり</u>の中で地域活動に興味を持つ方が増えることが今後の地域活性化につながると考えます。

5 地方創生塾に参加して良かったことについて

新型コロナウイルスの影響からグループワークの方法や講師との対話が<u>オンライン</u>になるなど<u>既存の講座方法からの変化</u>もあり、講師や参加者にご不便をおかけする点もありましたが、それぞれが<u>やりたいことをイベントという形にする方法を学ぶ場を提供できた</u>ことがよかったと思います。

(5) 成果と課題

ア 成果

子ども向けイベントを企画したい又はボランティアとして参加したいという市民が多数集まり、全国の事例や事業の企画方法を具体的に学ぶことで、コミュニティの活性化や市民活動の推進を図る人材育成が果たせた。

イ 課題

参加者同士の連携や目的の共有を深めるための時間が短かったため、今後はより連携を深め、集まった市民自らが目的に沿った活動を自分の力で行えるような働きかけが課題である。

「ほっかいどう学」地方創生塾(網走市) 2年目 第1回

日 時 令和2年8月30日(月)10時~12時

会 場 網走市西コミュニティセンター

参加者 31名

内 容 子どもイベントキャラバンサポーター養成講座 「全国の子どもイベントの事例学習」

今年度の地方創生塾は、「子どもイベントの企画と参加の仕方を学び、コミュニティセンターなどを会場とした子どもイベントキャラバンの実践を目指す」ことを目的に、来年2月まで計3回実施します。西コミュニティセンターを会場にした第1回創生塾には、31名の網走市民が集まりました。

昨年度に続き、一般社団法人とちぎ市民協働研究会 代表理事の廣瀬 隆人 氏を塾長に迎え、「まちの活性 化と子ども事業」をテーマに、「地域の現状」や子どもが 福祉委員として、高齢者の買い物に付き添いボランティ アとして関わるなどの「子どもでつながる地域づくり」をす る事例、栃木県鹿沼市の子どもたちが「ミニかぬま」とい う子どものまちをつくり、店を構えて物を売買したり「子ど ものまち」の市長選挙を行ったりするなど、まちづくりから 住民自治や社会の仕組みを学ぶ「担い手育成としての 子どもの体験事業」を参加者に分かりやすく紹介いただ きました。

講演終盤には、廣瀬塾長から来年度網走市で新たに活動する「子どもイベントキャラバン」実施に向けて、活動の進め方や参加者間の連携、活動の継続などの工夫について、アドバイスいただき終了しました。



【コロナウイルス感染症拡大防止対策した研修】



【写真や動画を活用しながら説明する廣瀬塾長】

次回は、10月25日(日)南コミュニティセンターで開催します。

成果と課題

定員を超える申込みがあり、講座の趣旨に賛同する市民が多く集まりました。 第1回目講座は、講師から全国の事例を紹介いただく講義形式だったこともあ り、参加者同士の交流を図るまでには至っていないため、今後の講座を通じて横 の連携を深めることが課題となります。

「ほっかいどう学」地方創生塾(網走市) 2年目 第2回

日 時 令和2年 10月 25日(日) 10時~12時

会 場 網走市南コミュニティセンター

参加者 28名

内容 子どもイベントキャラバンサポーター養成講座 「子どもイベントキャラバン実施に向けた組織づくり」

2回目の地方創生塾は、28名の市民が参加して、 子どもイベントキャラバンに参加を希望する個人や団 体の活動紹介とグループワークを行いました。

前回同様、塾長の廣瀬隆人氏から子どもイベントキャラバンの目指す姿や来年度の活動実施に向けた説明がありました。その後、今回集った個人や団体が現在活動していること、これからキャラバンの一員としてできることを参加者全体に紹介しました。

【紹介された個人や団体の活動内容(例)】

- ・音楽を取り入れた読み聞かせ
- ・創作体験(凧づくりや竹とんぼ、折り紙など)
- •科学実験
- 健康教室(遊びながら体の仕組みを学ぶ)
- 動物と触れ合う場づくり など(19 の個人や団体)

講座後半では、ゲームを通して話を聞く姿勢や会話をうまく繋げて課題を解決する大切さに気付くことを目的に、様々な個人や団体が6つのグループに分かれて課題解決型のグループワークをしました。その後、来年度子どもイベントキャラバンを実施するとしたらどの





ような役割やスケジュール感が必要かを「事務局」「時期」「対象」「方法」「調整」の5グループに分かれて、実施期日や参加対象などを話し合い、最後に全体で方向性を決める、という一つのイベントを実施するための一連の流れについてシミュレーションをしました。

成果と課題

今回は、自己紹介やワークの時間を取ったことで、参加者同士のコミュニケーションを図ることができました。また、イベントを実際に行う上で必要な役割に分かれて、実施を想定したシミュレーションをすることで、実践的な学習ができました。

次回、この講座を経て集った有志が自主的にイベントキャラバンに向けて、改めて具体的な計画を立て実行するということを参加者全員で共有できるようにしたいと考えています。

「ほっかいどう学」地方創生塾(網走市) 2年目 第3回

日 時 令和3年2月21日(日) 10時~12時

会 場 網走市向陽ヶ丘住民センター

参加者 26 名

内 容 子どもイベントキャラバンサポーター養成講座 「子どもイベントキャラバン実施に向けた企画」

3回目の地方創生塾は、廣瀬塾長とWeb アプリケーションでつないだ開催となりました。次年度の子どもイベントキャラバンの実現に向けて、参加者間で事業の目的を共有し、具体的な役割分担や開催時期等について話し合いました。

まず、塾長からこれまでの取組の振り返りや今後の事業展開について事例を交えながら概要を説明しました。

その後、来年度参加者が協働して企画・運営するために必要な事業の目的を共有しました。塾長からグループワークの手順説明があった後、前回の講座でイベントキャラバン事務局となった参加者が、司会、書記を務めてグループワークを進行しました。「講座に参加した理由」、「網走の子ども達に足りないものは何か」を参加者各自が付箋に書いたものを全体共有し、キーワードを抽出しました。その中には、「子どもが普段できない体験」「異業種のつながり」といったキーワードが挙がりました。

後半は、ブース方式によるイベントの展開イメージを共有しました。参加するメンバーごとに分かれて、どのような

講師による概要説明



ブースを設置するか、必要なスタッフ数、経費、そしてステージ発表の可否等を検討し発表しました。また、ボランティアとして事業に参加したい方については、どのような関わり方ができるか発表しました。

最後には、来年度の日程や実施会場、「企画・会計班」「広報・宣伝班」「会場・コロナ対策班」などの役割分担を決定しました。塾長から、今年度の総括と次年度開催に向けたアドバイスをいただいて終了しました。

成果と課題

「子どもイベントキャラバン」実施に向けた具体的な事業展開や役割分担、日程等が決まりました。参加者の事後アンケートには、講座内容について「とてもよかった」「よかった」と答えた方が80%を超えており、また「勉強になった」や「学んだことを生かしたい」という感想があり、参加者のこれからの活動の一助になったと思います。

2 伊達市 (胆振管内)

伊達市は、北海道の道央地方南部に位置し、四季を通じて温暖な気候である。2006 円 3 月、旧 大滝村との合併により四季折々の美しい癒しの里として定評がある温泉郷「大滝区」が加わった。 伊達市の開拓は、1870 年に、仙台藩一門亘理領主の伊達邦成とその家臣による集団移住という他 に類を見ない形態で行われ、北海道ではとりわけ古い歴史と伝統文化を有している。

大滝区は有珠山から約32キロに位置しており、これまでの噴火の経緯からは「降灰、空が暗くなる」等以外の直接的な大きな被害は想定されていません。地盤も強固な岩盤でできており、地震にも強い地域と言われている。また、札幌から約2時間、新千歳空港から約1時間の位置にあり、有珠山噴火時に訪れるであろうボランティア等が有珠山周辺の壮瞥町、伊達市、洞爺湖町へと向かう際の通過地点である。多くの支援物資も同じく札幌や千歳方面から被災地へと向かう事が予想されるため、大滝はボランティアスタッフや支援物資のハブ拠点となりうる可能性を秘めていると言える。

令和4年12月末現在の人口は32,391人で、高齢人口率(65歳以上)は37.9%である。今後団塊の世代(1947年~1949年生まれ)が後期高齢者となる2025年には、75歳以上の高齢者の増加がさらに進むと予想されている。

(1) 実施目的

新たな学校の開校を契機に、地域の活気づくりやネットワークの再構築に資する活性化プランづくりを行い、自ら地域課題の解決に取り組む人材の育成を目指す。

(2) 実施主体

伊達市大滝区おおたき新聞くらぶ

(3) 実施概要

ア 第1回(資料3-4)

実施日時	令和2年7月6日(月)19時30分~21時00分
会場	オンライン
参加者	伊達市民7名
講師	NPO法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏
学習プログ	テーマ「有珠山が噴火した際(災害時)、大滝の住民ができる役割について」
ラム	○ 有珠山噴火時の体験を各メンバーから聞き取り、想定される被害内容に ついて確認

イ 第2回(資料3-5)

実施日時	令和2年9月5日(土)14時00分~16時00分
会場	TOYA CAFE

参加者	伊達市民 10 名
講師	火山マイスター 長友 加也 氏
学習プログ	テーマ「有珠山噴火時の状況と避難場所としての大滝の役割について」
ラム	○ 講師によるテーマに沿った講話

ウ 第3回(資料3-6)

実施日時	令和2年10月12日(月)19時00分~21時00分
会場	優徳集会所
参加者	伊達市民 6 名
講師	なし
学習プログ	テーマ「公民館研究集会北海道大会 in そうべつに参加して」
ラム	○ 参加したメンバーからの報告と最終的な成果物のプレ作成について検討

エ 第4回 (資料3-7)

実施日時	令和2年11月30日(月)18時30分~20時30分				
会場	Web 会議システム (Zoom) による開催				
参加者	伊達市民8名				
講師	NPO法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏				
学習プログ ラム	テーマ「私達が考える災害が起きた時の大滝住民の動きの構想(プレ成果物) について」 〇 構想の検討と講師からの講評や助言				

才 第5回

実施日時	令和3年1月5日(火)19時30分~20時30分
会場	Web 会議システム (Zoom) による開催
参加者	伊達市民3名
講師	なし
学習プログ	テーマ「2年間の活動報告会のあり方について」
ラム	○ 次回の準備に係る打合せ

力 第6回(資料3-8)

実施日時	令和3年2月15日(月)19時00分~20時30分
会場	YouTubeLIVE による開催 (3 画面 Zoom との接続)
参加者	伊達市民34名(動画再生回数150回以上2月22日現在)
講師	NPO法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏

学習	プ	口	グ
ラム			

テーマ「災害時に助け合えるまちになるために」

○ パネルディスカッション: たきしんくらぶの2年間の取り組みを講師と 語る

(4) 事後調査

ア 参加者

事業終了後、参加者を対象に、アンケート調査を実施し、以下の回答を得た。(n=5)

1 参加の動機について

項目	よく当て はまる	少し当て はまる	あまり当て はまらない	当てはま らない	未回答
まちのために活動したいと考えたから	4	1			
仲間がほしかったから	2	2		1	
周囲に誘われた・勧められたから	2	1	2		
何かしたいと思ったから	2	2		1	

2 地方創生塾を通して、「身についた」「向上した」「新たな気付きがあった」ことについて

項目	よく当て はまる	少し当て はまる	あまり当て はまらない	当てはま らない	未回答
自分の考えを的確に相手に伝えること	2	2	1		
新たな人間関係をつくること	4	1			
まちのことを考えること	4	1			
まちのために活動する意欲	2	3			
まちをより好きになったこと	3	2			

3 今後の活動について

項目	思う	思わない	無回答
今後、この講座での学びを生かし、ま ちのために活動したいと思いますか	5		

- 4 「思う」と回答した方は、どのようなことをしてみたいですか
- ・防災について情報発信を続けたい
- ・エネルギー自給についてや草の根的な活動を続けていきたい
- ・実際の大滝区での避難についてのさまざまな課題を掘り下げていきたい
- ・移住者や移住希望者がこの地域のことをよくわかるようなデータやつながりを丁寧に作っていきたい
- ・人と人とが出会い、繋がりを持てるような活動をしてみたい
- ・地域コミュニティを意識した事業展開

イ 事業担当者

事業終了後、事業担当者を対象に、記述式のアンケート調査を実施し、以下の回答を得た。

1 今年度のプログラム全体(講座の回数も含む)について

<u>コロナの影響</u>があり、残念ながら塾長が実際に大滝に来ていただくことが叶いませんでしたが、<u>オンラインでの学びも予想以上に深く</u>、最終的にはオンラインを使ってできたので、良かったです。回数も丁度良かったと思います。

2 学習者(参加者)間の関係づくり(コミュニケーションスキルの向上等)について

オンラインに否定的だった参加者も、今回をきっかけに<u>オンラインの可能性に触れる</u>ことができ、<u>新たなコミュニケーションのスキルの向上に繋がった</u>と思います。少人数の団体ではありますが、資料や意見を出し合って1つのプロジェクトをやり遂げたのは、<u>関係性をより強くする結果となったと思います。</u>

3 他機関・団体等との連携について

他のNPOや行政、社協とのつながりがこの2年間をかけて(とくに終盤に)生まれたので、 取り組みの成果を感じています。この繋がりを<u>今後も途絶えずに連携を深めていけるように</u> していきたいと思っています。

4 本事業を通した地域活性化について

この地域に必要なことを講師や担当者からの助言等で気付くことができました。地域の中だけでなんとかしようとするのではなく、<u>いろいろな地域や人と繋がることでこの地域が活</u>性化していく可能性が開けると知ったことが大きな成果です。

5 地方創生塾に参加して良かったことについて

おおたき新聞くらぶの取組に<u>塾長や担当者が関わって、一緒に考えてくださったことが何</u>よりも心強く、多くの気付きを得られたことに感謝でいっぱいです。

(5) 成果と課題

ア成果

コロナ感染症拡大により、人が集うことができない中でも「防災」をテーマに理解を深める記事をフリーペーパー「おおたき新聞」内に継続して掲載することを通して、住民に防災への意識を喚起しながら、情報を通した「つながり」づくりができた。

また、公民館研究集会や他市町村での学びの場、オンラインでの報告会を通して、大滝内外の住民との繋がりの構築をすることができた。

イ 課題

大滝区内の地域住民の新たな人材の発掘や育成には、地域住民間の「顔の見える関係性」の構築と行政との連携が必要であった。「顔が見える関係性」の構築には上記の成果に記載したとおりであるが、ネットワークの再構築に資する活性化プランづくりには行政との連携・協働が必要であり、新たな人材の育成に繋げるプランの作成まで至らなかった。

今後、既存の組織を活用したネットワーク化を活用しながら、行政と連携して、人材の育成や地域の活性化を図る必要がある。

「ほっかいどう学」地方創生塾(伊達市大滝区) 2年目 第1回

日 時 令和2年7月6日(月) 19時 30分~21時

会 場 オンライン形式

参加者 9名

内容 テーマ「有珠山が噴火した際(災害時)、大滝の住民ができる役割について」

第1回ほっかいどう学地方創生塾(伊達市大滝区)は、コロナウイルス感染症拡大防止のため、オンライン会議ツールを活用して実施した。参加者は、「たきしんくらぶ」メンバー7名のほか、NPO法人 ezorock 代表理事の草野 竹史 氏、北海道立生涯学習推進センター社会教育主

事の田尾 和祐 氏がオンラインで参加した。

1時間30分にわたるオンライン会議では、前回の有珠山噴火時の体験を各メンバーから聞き取り、想定される被害内容について確認した。噴火後に移住してきた住民もいることから、住民を対象とした自然災害や避難方法について理解する学習の場をつくることが大事であること、災害時には大滝の住民だけで対処するのではなく、近隣市町村などの団体と協働していくことが有効だということが、オンラインでの意見交流や草野塾長の助言から気付くことができた。

草野塾長をはじめ、様々な立場でオンライン研修に参加したメンバーから、大滝の立地条件にあった避難所運営や災害対応ができること、特に災害支援のハブ地点として、多くの可能性があるという提言もあり、災害時を想定して地域住民の防災意識を高める大切さを確認できた会議だった。



【オンライン会議の様子】



【地域の活動をおおたき新聞で情報提供】

成果と課題

災害ボランティアの経験が豊富な草野塾長から他市町村や他団体の活動事例の情報を聴くことができ、これからの「たきしんくらぶ」としてできること、やるべきことなど活動の方向性が見えてきたことがよかった。

コロナウイルス感染症拡大防止の対策がとられている中、「たきしんくらぶ」メンバーや地域住民を一堂に会した取組ができないことに苦慮している。

「ほっかいどう学」地方創生塾(伊達市大滝区) 2年目 第2回

日 時 令和2年9月5日(土) 14 時~16 時

会 場 TOYA CAFE

参加者 10名

|内 容 テーマ「有珠山噴火時の状況と避難場所としての 大滝の役割について」

第2回ほっかいどう学地方創生塾(伊達市大滝区)は、会場を壮瞥町にある「TOYA CAFE」に移し、火山マイスターの長友 加也 氏からこれまで起きた有珠山噴火時の状況説明と避難場所としての大滝の役割についてお話しがありました。

1977~1978年までの噴火と2000年の噴火した際の有珠山の様子や周辺に住む住民の動きについて写真や資料を使って説明いただいた後、20年に1度の周期で噴火すると言われている有珠山の災害について、大滝区の住民が避難場所のサポーターとして、避難者の困り事の対応など自分たちができるアイディアを出し合いました。

最後に長友氏から、火山マイスターは観光ガイドをするのではなく、各地域で住民の防災意識を高める取組を行う役割、災害前から学びの場を通して「地域住民をつなげる」役割があるので、たきしんくらぶのメンバーにも火山マイスターになってほしいとお願いがありました。参加したメンバーから、「壮瞥町が火山と共生しているということがわかりました。行政のできること、地域住民のできることについて整理しておくことも、大切



【説明を聴くたきしんくらぶのメンバー】



だと感じました」や「大滝住民として有珠山噴火を他人事とせず、いざという時に他の地域と助け合えるような関係性を築いていくことが大切ではないかと感じました」という感想が寄せられました。

成果と課題

「噴火に備えるにはまず噴火について知らなければならない」という気付きから始まった今回の学習会は、わかりやすい説明のおかげで有珠山についてより身近になりました。そして、実際に壮瞥町民の方と交流することで、大滝という枠を超えた災害対応のイメージを具体的に持つことができました。

課題としては、住民レベルの連携をどのように拡大していくか、また行政とどのような連携を実現させていくことができるか、今後は具体的な「備え」に対しての学びの場などを持ち、災害対応カアップのための第2、第3の行動を起こして行くことが必要です。

「ほっかいどう学」地方創生塾(伊達市大滝区) 2年目 第3回

日 時 令和2年 10 月 12 日(月) 19 時~21 時

会 場 優徳集会所

参加者 6名

内 容 テーマ「北海道公民館大会 in そうべつ」の参加報告 と2年間の活動のまとめについて検討

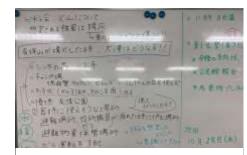
第3回ほっかいどう学地方創生塾(伊達市大滝区)は、10月6~7日に壮瞥町で開催された北海道公民館大会の報告をしました。参加したメンバーから、たきしんくらぶの取組は、地域住民が楽しく学んで、主体的に地域の未来を創っていく活動であるが、実は「公民館運動」の動きに近いと感じたことを伝えました。また、基調講演、シンポジウム、分科会などから得た最新の情報を共有し、「おおたき新聞」の来月号の記事について検討しました。

また、2年間の活動のまとめ方を話し合い、「私達が考える災害が起きた時の大滝住民の動きの構想のまとめ」を作ることにしました。その内容を検討するため、ブレーンストーミング的手法を使って、いろいろな意見を出し合い、ホワイトボードにまとめました。

第2回の創生塾で学んだ気付きから、「水・暖・トイレ」 が災害時に必要なキーワードということから、大滝の中に ある資源や活用方法について洗い出しました。夏であれ



【報告を聞くたきしんくらぶのメンバー】



【ホワイトボードにまとめられた内容】

ばキャンプできる公園(子どもの遊具もあり)がいくつかあること、冬であれば「薪ストーブ」の使い方の説明や薪を提供できる人材がいることなどの情報が提供されました。また、湧き水があること、飲料でなくトイレを流すために使える水源などの確認、地域の人材や他地域との連携など、事前に情報共有することのほか、顔の見える関係性を築く必要があることを確認しました。

成果と課題

自分達の取組が「公民館運動」に近い活動をしていると認識できたことは大きな励みになりました。創生塾 2 年目の最終的なゴールも見据えることができ、自分達がたきしんくらぶとして、住民としてできることなどを自覚して残りの創生塾での学びを積み上げていこうというビジョンが持てました。

また、これまでも「おおたき新聞」で防災についての記事を掲載してきましたが、 これからも少しずつアップデートした情報を掲載していきたいと思うので、より住 民の知りたい内容や役に立つであろう情報をメンバーで吟味して取り組んでいく 必要があると感じました。

「ほっかいどう学」地方創生塾(伊達市大滝区) 2年目 第4回

日 時 令和2年 11 月 30 日(月)18 時 30 分~20 時 30 分

会 場 Web 会議システム(Zoom)による開催

参加者 8名

内 容 テーマ「私達が考える災害が起きた時の大滝住 民の動きの構想について」

第4回ほっかいどう学地方創生塾(伊達市大滝区)は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からオンラインによる開催となりました。

まず、たきしんくらぶが 2018 年7月から 2020 年 12 月までに発行した新聞の中から、防災に関する記事をもとにこれまでの活動を振り返りました。

その後、2年間の創生塾の取組を「私達が考える災害が起きた時の大滝住民の動きについて」にまとめるため、草野塾長から提案で過去の噴火時の被害状況を改めて調べました。その結果、塾生から実際の被害やボランティアの人数等、数値化したデータの紹介があり、再度被害状況をイメージすることができました。その後も、大滝の資源として「大滝セミナーハウス」の活用の可能性やNPOとは何かということについて意見交流され、自分達ができることへの認識を深めることができました。また、災害のフェーズによる対応内容の違いや連絡手段の確保としてのコミュニケーションツールの重要性、大滝地区



【オンライン会議に参加した8名】



【報告を聞くたきしんくらぶのメンバー】

の中継ポイントとしての役割など、東日本大震災時の事例をもとに塾長から紹介がありました。

次回は、2年間の活動をまとめた「私達が考える災害が起きた時の大滝住民の動きについて」について最終確認する予定です。

成果と課題

「たきしんくらぶ」というフリーペーパー発行など地域で活動している団体が、防災について学び、災害時には支援活動もするということは他の地域でもあるようで、改めてこれまでの活動が人とのつながりを広げながら災害に備える活動になっていることに気付きました。草野塾長から、大滝という立地条件と環境が持つ可能性を成果物の中に盛り込むことや似ている事例(岩手県遠野市など)を調査していくことが、今後の取組になることを助言していただいたので、次回1月の第5回の会議までに防災構想をまとめていきたいと思います。

「ほっかいどう学」地方創生塾(伊達市大滝区) 2年目 第6回

日 時 令和3年2月15日(月)19時00分~20時30分

会 場 YouTubeLIVE による開催(3画面 Zoom との接続)

参加者 34名(動画再生回数150回以上2月22日現在)

内容テーマ「災害時に助け合えるまちになるために」たきしんくらぶの2年間の取り組みをNPO法人 ezorock 草野竹史氏と語る

第6回ほっかいどう学地方創生塾(伊達市大滝区)は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からオンラインによる公開イベント開催となりました。

まず、草野塾長からスピーカーであるたきしんくらぶ山城会長、事務局川田、メンバーで地域お越し協力隊の 天野の紹介がありました。

その後、大滝の部分的な停電の影響で一時的に草野塾長からたきしんくらぶの発足についての説明が川田の代わりになされました。天野から「有珠山噴火時に大滝の地理的条件からできる役割、資源、可能性」についてのレポート共有がなされ、視聴者からのたくさんのリアルタイムのコメントも寄せられました。「普段のつながりがいざという時の力になる」という学びから2年間取り組んで来た大滝内外の関係性の構築と大滝ができる後方支援の可能性について報告しました。



【オンラインイベントのスピーカー4名】



【視聴している参加者からのコメント】

草野氏から、たきしんくらぶや天野氏の新しいとりくみが今後地域の入り口的な役割を持ち、普段から人と人とをつなぐ拠点として大切だとの話がありました。 今回最終回となりましたが、結果的に多くの人に学びの共有をすることができ、また大滝という地域について知っていただくこととなりました。

成果と課題

オンラインイベントにしたおかげで、伊達市街地をはじめ、広範囲からの参加申込を頂いたことは大きな成果でした。防災に熱心な活動をされている伊達市街地の方との出会いにも繋がり、冬期間や大雨時の移動の課題について検討する必要がある、という事に気づかされました。また、内閣府の出している「受援計画」も参考にするとよい、とのコメントもいただき、今後も学んでいくべき事が見えてきました。創生塾は終わっても、ここで学んだ多くのことをこれからも大滝のまちづくりに活かしていきたいと思います。

第4章 モデル事業

- 1 鷹栖町(上川管内)
- 2 芦別市(空知管内)
- 3 成果と課題

第4章 モデル事業

1 鷹栖町 (上川管内)

鷹栖町は、北海道のほぼ中央、上川管内の中心部に位置し、北海道第二の都市旭川市に隣接している。周りを小高い山に囲まれ、全体的には盆地状をなし、中心部を石狩川に注ぐオサラッペ川が北から南へ貫流している。

品質・収穫量ともに道内屈指の稲作、付加価値の高いきゅうりの生産など、良品質な農産物の 供給地帯であるが、農家戸数の減少と農業従事者の高齢化等による労働力不足は深刻な課題となっている。

令和元年12月末の人口は約7千人で、高齢化率は33.5%に上昇している。

(1) モデル事業実施の経緯

次世代を担う若者が、社会教育による学びを通じて地域の課題やその解決方法を様々な世代の住民と共に実践的に学ぶことは、持続可能な地域運営につながる。

こうしたことから、鷹栖町におけるモデル事業では、若者の声やニーズを若者自身が実際に具 現化する取組を通じて、地域への愛着を育むことを目指す。

実施理由	新たな総合計画及び社会教育中期計画で「子どもから大人までのふるさと共育」に重点を置いているが、これまで高校生世代を対象とした社会教育的要素をもった取組は展開できていなかった。こうしたことから、高校生世代を対象として、地域への愛着を育み、結果的にまちづくりへの参画へ繋がる新規事業を確立させたいと考える。		
実施場所	鷹栖町内		
参加対象者	町内に在住の高校生、北海道鷹栖高校に通学する高校生5~10名程度		
事業後の参加者の活 動に対する見通し	本事業から生まれた新たなコミュニティによる取組の展開		
連携予定の機関	北海道鷹栖高等学校		
講座予定回数	5~6回(うち講師派遣2回)		
取組イメージ	1年目 ・新たなコミュニティの創出 ・高校生視点での新たな取組の企画立案		
	2年目 ・1年目に計画した取組の実施 ・高校生のアイディアや発想の具現化に向けた取組		

(2) 実施目的

- ・ 同じ世代のつながり、仲間意識を向上させ、ふるさと鷹栖への愛着心を高める。
- ・ 参加する高校生の主体性を尊重し、自分の未来、鷹栖の未来を考えるきっかけとする。

(3) 実施主体

鷹栖町教育委員会

(4) 実施概要

講座名 鷹栖町高校生プロジェクト

ア 第1回(資料4-1)

実施日時	令和2年8月22日(土)14時00分~16時00分		
会場	鷹栖地区住民センター		
参加者	旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生5名(町内在住4名、町外在住		
	1名)		
講師	NPO 法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏		
学習プログ ラム	○ 高校生プロジェクトの趣旨説明○ 活動の方向性についての共有		

イ 第2回(資料4-2)

実施日時	令和2年10月4日(日)15時00分~17時00分		
会場	鷹栖地区住民センター		
参加者	旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生5名(町内在住5名)		
講師	NPO 法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏		
学習プログ ラム	○ 地域課題の洗い出しと解決に向けた活動について○ 鷹栖町の外から見たイメージ~鷹栖町出身大学生と塾長との対談○ 鷹栖町を活性化するための事業企画:オープンスペーステクノロジーの手法を用いて		

ウ 第3回(資料4-3)

実施日時	令和3年2月27日(日)14時00分~15時30分		
会場	北野地区住民センター		
参加者	旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生3名(町内在住3名)		
講師	上川教育局社会教育指導班主査 小島 紀行 氏 社会教育主事 佐藤 麻友美 氏		
学習プログ ラム	○ 鷹栖町内で新たに活動している町民・企業の紹介 ○ 企画会議のプロセスと手法		

工 第4回(資料4-4)

実施日時	令和3年3月13日(土)14時00分~16時30分		
会場	鷹栖地区住民センター		
参加者	旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生4名(町内在住4名)		
講師	NPO 法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏		
学習プログ ラム	○ これまでのふりかえり○ 若手行政職員と協働して事業企画とプレゼンテーション		

(5) モデル事業の視点

視点1 聞き取り調査等による地域の実情やニーズの把握

ア 活動の内容

【自分が知る地域のこと、地域に求めることを交流して地域の実情を紹介】

・より深くメンバー同士を知るため、「自分らしいエピソード」や「鷹栖に足りない ものは?」などのテーマで、互いに紹介しあった。

【町外から見える鷹栖町のイメージを知る~ニーズに繋げる~】

・鷹栖町出身の札幌の大学生と塾長とのトークセッションを実施した。塾生にとって、大学生は自分の将来の姿を重ねられる存在であり、またこのプロジェクトが継続した時に塾生自らどう関わり続けられるのか、大学生の経験談を交えた「生の声」を聞く機会となった。



第2回報告書から抜粋

- ・旭川市内の高等学校へ通う鷹栖町在住の塾生が多い中、塾生や若手職員から旭川市の状況 と比較しながら自分が知る地域のよさや鷹栖町に必要なものを発表しあいながら、塾長が 地域の様子をまとめた。
- ・昨年まで鷹栖町に住んでいた札幌の大学生から、地元から離れて気付いた「鷹栖町のよさ」 「こんな鷹栖町になったらいいな」という思いを塾生に伝えることで新たな気付きがあっ た。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・年度当初は、町内在住の移住者から鷹栖町の良さを聞き取る活動を予定したが、新型コロナウイルス感染症拡大により実施できなかった。そのため、塾生は旭川市内の高等学校に通う友人から聞いた鷹栖町の印象を発表し合い、町外から見える鷹栖町の魅力や課題について共有した。
- ・鷹栖町出身の札幌の大学生が地元から離れて気付いた鷹栖町のよさや課題を聞いて塾生に 新たな気付きを与えた。

視点2 事業に関わる人との方向性の共有

ア 活動の内容

【自己紹介から関わる人のことを知る】

- ・塾長から、この事業の進め方やコンセ プトの説明があり、関わる大人も含め ての自己紹介を行った。
- ・高校生の参加理由はそれぞれで、 中には「町長になりたい」との思いを持って参加した方もいるなど、個性あふれるメンバーが集った。



【創生塾を企画した鷹栖町教育委員会担当者の思いを共有】

・鷹栖町教育委員会 山本 裕太 氏から、この事業を立ち上げた経緯を説明した。

第1回報告書から抜粋

【小グループでの意見交換でやってみたいことを共有】 ※第2回以降も実施

・集まった感想やこれからどんなことが できるだろうかなどについて、少人数 グループで意見交換した。「このよう な事業に参加できて楽しい」や「高校 生ならではの企画をしてみたい」、「鷹 栖町のシンボルづくりはどうか」、「人 を呼ぶイベントをやってみたい」など の意見が挙がった。



第1回報告書から抜粋

・毎回小グループを作り、塾生だけではなくその場にいる若手職員も話し合いに加わり鷹栖 町への思いや事業の方向性を共有した。

イ 活動を行う上での工夫等

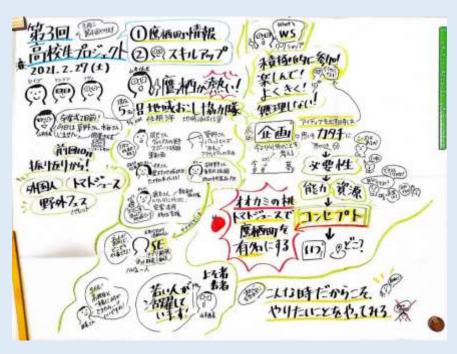
- ・同じ目的でこれから一緒に活動するため、最初の顔合わせの回では、参加者同士のことや 事業の趣旨や流れを"知る"ことに重点を置き、アイスブレイクの要素を取り入れ、事務局 の事業への思いを説明するなど相互理解できる機会を設けた。
- ・参加者の活動の方向性を合わせるため、対話や恊働の場を毎回取り入れるなど多様な考えを共有した。

視点3 継続性のある取組とするための工夫

ア 活動の内容

【学習から行動へつながるためのスキルアップする場を創出】

・上川教育局社会教育指導班の小島主査・佐藤社会教育主事の進行で、「企画会議のプロセス」や「企画の手法」を学んだ。その後、自分達の思いや事業のねらい、地域住民など事業に関わる人々のニーズ、地域資源の分析を塾生同士で意見を出し合い、ワークシートにまとめた。塾生がワークシートを記入しながら、塾生同士が議論した内容を下記のとおりまとめた。



第3回報告書から抜粋

【若手職員と協働して具体的な企画案を作成する場の設定】

・シンプルに企画やプレゼンテーションできる「KP 法※」を用いて、3つのテーマに沿ってグループワークを行った。グループワークでは、若手職員も加わって意見交流しながら企画案を作成した。作成した企画案はA4用紙10枚程度にまとめ上げ、全体で共有した。発表後には、聞き手全員から「Good」「More」の視点で付箋にコメントをもらった。



【事前事後アンケートを活用して参加の意欲を確認】

・事前アンケートには、塾生の不安や参加の意欲を記入し全体(運営者間)で塾生の状況把握を確認した。事後アンケートには、内容の理解度や次回への思いなどを塾生に記入してもらい、次回のプログラムの参考にした。

第4回報告書から抜粋

- ・第3回は、第2回で学んだプレゼンテーションの手法を用いて、個人のスキルアップにつ ながる機会を設けた。また、そのスキルを第4回で活かした。
- ・塾生だけではなく、若手職員と協働して企画案を作成し、互いに意見を出し合うことで新 たな気付きがあった。
- ・アンケートを通して塾生の事業に対する姿勢を知ることで、次回以降の関わり方や事業展開を柔軟的に変更した。
- ※「KP法」・・・紙芝居プレゼンテーション法。A4の紙とホワイトボード、マグネットがあれば、誰でも、どこでもすぐにできる超シンプルなプレゼンテーション&思考整理法。

出典:川嶋直著『KP法シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション』みくに出版 2013年

イ 活動を行う上での工夫等

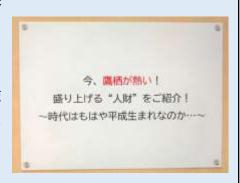
- ・議論した内容をホワイトボード上に図や言葉でまとめることで、当日(第3回)学んだことを振り返り時に理解したことや学びの成果を塾生は見取ることができた。次回(第4回)の活動に向けて、意欲を高める手立てとした。
- ・塾生の思いを具体的に表現するため、KP法を用いて若手職員とともに企画案を作り、プレゼンテーションする機会を設けた。プレゼンテーション後には、聞き手から前向きなコメントをもらい、プランの再考に生かした。

・事業後にアンケートを取り、参加者自ら事業の振り返りと次の活動に向けた意欲付けを行 うこと通して、参加者が主体的に活動する環境づくりに努めた。

視点4 テーマ設定の工夫

【全体の場でのプレゼンテーションから小グループで検討】

・「何か企画を考えてみよう」をテーマに、塾長からメンバーの個性や役割を活かした企画立案の進め方を学んだ。そして、オープン・スペース・テクノロジー※の手法を用いて、塾生のうち3名が「野外フェス」「外国人との交流」「特産品のトマトジュースレシピコンテスト」という鷹栖町を活性化させるための企画を発表した。ほかの塾生やスタッフが3つ企画ごとのグループに分かれ、具現化に向けて、意見交換した。



第2回報告書から抜粋

ア 活動の内容

【町内で活躍する人材の紹介】

・教育委員会山本係長から、「よそ者」「若者」の 視点から町内で新規事業を展開している方々を 紹介し、現在鷹栖町では、創生塾生も含めて「若 者」のチカラを求めていることを説明した。



第3・4回報告書から抜粋

- ・事業目的を意識した新規事業を企画立案する際に、オープン・スペース・テクノロジー※の 手法を用いて事業テーマに迫る提案を行った。
- ・「同じ世代のつながり」「地域の担い手」の育成の視点から、現在鷹栖町内で起業している 若手人材を紹介し、塾生に多様な人材との関わることもできることを説明した。
- ・テーマ設定について現在、「野外フェス」「外国人との交流」「特産品のトマトジュースレシ ピコンテスト」の3点が挙がっている。来年度早々に事業目的と照らし合わせながら、事 業テーマを選定する。

※「オープン・スペース・テクノロジー」・・・テーマに関係する人々が一堂に集まり、主体的に課題を生み出し、複数箇所で同時に話し合いのセッションを開くことで、それぞれの課題に取り組む。参加者は本音で対話を行い、問題を共有し、解決に向けてアクションプランがスピーディーに生成される。

出典: ハリソン オーエン著『オープン・スペース・テクノロジー~5人から 1000 人が輪になって考えるファシリテーション~』 ヒューマンバリュー 2007 年

イ 活動を行う上での工夫等

- ・参加者の思いを一つ一つ拾い上げてつなぎ合わせていく進め方を通して、楽しくやりがい を持てるように進めた。また、塾生だけではなく、町役場の若手職員も一緒に企画に参加 することで、互いにアイディアを出し合うことで、テーマに具体性が見えた。
- ・町内で新たな取組を行っている地域住民の中で塾生の年齢に近い人材を紹介することにより、塾生の意欲を高めるとともに、塾生が企画する取組にその人材も「巻き込む」情報を 提供している。

(6)調査結果

ア 参加者

参加者の事業の実施前後の意識の変容を検証するため、質問紙調査を実施した。質問紙は、 道立生涯学習推進センターの職員が作成した。

各項目は、4件法で実施し、教育効果を検証するため、調査時期である「事前」と「事後」 の平均値を比較した。

調査時期と回答は、第1回事前 (n=5)、第1回事後 (n=5)、第2回事後 (n=5)、第4回事後 (n=4) の計4回である。

調査の結果は、図4-1のとおりである。

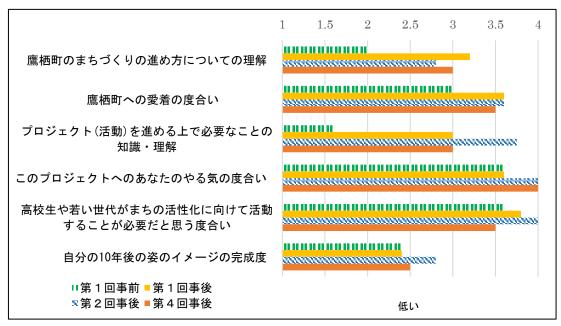


図4-1 参加者の事前と事後の意識変容調査結果 ※第3回は未実施

イ 事業担当者

事業終了後、事業担当者を対象に、記述式のアンケート調査を実施し、以下の回答を得た。 質問項目は、次の3項目である。

- ①担当者の開始前の心境や開始前に準備したこと (塾生に向けての思いや塾生を募集する際の工夫など)
- ②創生塾を行っている時の担当者から塾生への対応(塾生にどのようなアプローチしたか?)
- ③担当者の事業終了後の心境や塾生の変化で気付いたこと

項目	①担当者の開始前の心境や 開始前に準備したこと	②創生塾を行っている時の 担当者から塾生への対応	③担当者の事業終了後の心境 や塾生の変化で気付いたこと
第1回 令和2年 8月22日	高校生を対象とした事業 実績がなく、参加者がどの程 度来るかの不安はあった。 的確に周知するため、対象 者本人へチラシを送付し、チ ラシのレイアウトも堅苦し くないよう配慮し、事業趣旨 を明確に伝えた。	高校生にとってこの事業が「負担」とならないよう、接し方に配慮した。 事業説明において、事業 実施の背景と目的を明確に 伝えた。伝え方も、行政らし さを感じさせない資料づく りとして配慮した。	まずは、このような場を求めている高校生が"いた"ことが収穫であった。 参加目的が多様で偏っておらず、今後の展開が楽しみになった。
第2回 令和2年 10月4日	前回からやや時間が空いたので、振り返りの場を設けた。 高校生の主体性を損なわないよう、その場の空気感を 大切にするため、次までにこれをやらなければいけない 等の負担を与えないようにした。	行政側からの要望や押し付けは一切ないように配慮した。 グループディスカッション時には、高校生の意見や考えを尊重し、否定的な見解を見せないようにした。	担当者サイドが思っている以上に、ふるさとへの愛着、思いが高いと感じた。 高校生から気付かされる部分も多く、行政職員として考えさせられることも。町で進めていく「ふるさと"共"育」を肌で感じた。

第3回 令和3年 2月27日	第2回から期間が空いての開催となったため、塾生の意欲が下がっていないかの不安はあった。 普段の生活で、高校生があまり知る機会がないであろう、 應栖町の"人"にスポットをあてて話題提供を行うこととした。 特に、塾生に年代が近い 20 歳代の話題をメインとした。	久しぶりに集まる機会で あったため、 リラックスで きる雰囲気づくり を心掛け た。	企画の大枠ができたことで、 塾生自身も何を考えたらよい か明確になり、グループワーク も活発になったように見えた。 高校生は、行政とは違う目 線での考え方を持っていることをいかに取り入れられる か、行政側としても検討を進 めなければならない。
第4回 令和3年 3月13日	年度内最後の開催となるため、どこをゴール地点にするべきか、担当側で明確にしきれなかったが、満向性をのすり合うとができた。具体になると、これまでの経験からどうしても場の雰囲気や参加者の不足の配慮を心掛けた。	和やかな雰囲気づくり。 高校生自身の考えをうまーク 引き出しながらよう配慮 リフを進めるよう配慮 た。 どうすれば具現化できる か、常に肯定的な方向に むようなアプローチ た。	本事業においては、塾長のスキルなしては、塾長のの表もされなからきまれなかをしている。塾長の力をしている。塾を生かれたと感じからないかをできませい。 本事性の大きないかをできませいがある。一次年度の展開につながも、できまれているのでは、高校生もからのではないがある。またいが、よンバーののではなられたのではないたのではないができまれているのではないたのではないがあるよう、大きないができるよう、行政のを見現していているのではないたのを見現していているのではないたののを見まれている。

(7) 成果と課題

- ・ 「鷹栖町のまちづくりの進め方についての理解」「プロジェクト(活動)を進める上で必要なことの知識・理解」が毎回塾生の学びの時間を設定したことにより、1ポイント以上と大きな上昇が見られたと考えられる。募集チラシの段階では、どんな活動するのか明確ではなかったため、どのようなプロジェクトなのかわからず、1回目事前アンケートでは、「知識・理解」に関わる項目の数値が低かったと考えられる。
- ・ 「高校生や若い世代がまちの活性化に向けて活動することが必要だと思う度合い」が1回 目開始前より4回目事後より低い要因は、高校生や若い世代の活動による具体的な活動がで きなかったことと考えられる。
- ・ 事業当初から一貫して塾生である高校生の思いを具現化できるよう、丁寧に対応しながら 多様な意見を引き出していた。
- ・ 担当者自身も高校生を主体にした事業に初めて携わり、さらに事業プランが創生塾の活動 を通して作りあげるという形で進行するため、これまで行政の進め方と違う手法で事業立案 することから不安を抱えながらスタートした。塾長の進行、塾生との関わりを通してその不 安感が徐々に消えていることがわかる。
- ・ 塾生とともにグループワークに参加し意見交流することを通して、塾生が若手職員から学ぶことができたとともに、若手職員も高校生である塾生から「マチへの思い」「高校生ならではの事業構想」で新たな気付きがあり、互いに刺激し合うこと機会になった。

「ほっかいどう学」地方創生塾(鷹栖町) 1年目 第1回

日時

令和2年8月22日(土) 14時~16時

会場

鷹栖地区住民センター

参加者

旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生5名 (町内在住4名、町外在住1名)

内容

「鷹栖町高校生プロジェクト」の第1回は、申し込みしてくれた高校生5名(うち1名は欠席)と、当日飛び入りの1名を加えてのスタートとなりました。初めて会う人もいましたので、参加者同士のこと、この事業のことを"知る"ことに重点を置き、アイスブレイクの要素を取り入れて実施しました。 塾長の草野氏から、この事業の進め方やコンセプトを説明いただいた後、関わる大人も含めての自己紹介を行いました。高校生の参加理由はそれぞれで、中には「町長になりたい」との思いを持って参加した方もいるなど、個性あふれるメンバーが集いました。

その後、町教育委員会から、この事業を立ち上げた経緯を説明し、集まってみての感想やこれからどんなことができるだろうかなどについて、少人数グループで意見交換しました。「このような事業に参加できて楽しい」や「高校生ならではの企画をしてみたい」、「町のシンボルづくりはどうか」、「人を呼ぶイベントをやってみたい」など、大人顔負けの意見も飛び出し、有意義な初回となりました。

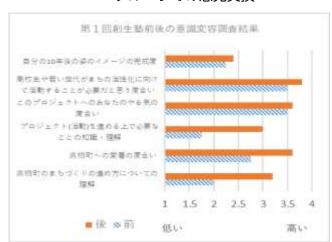


講師からの事業の説明

グループでの意見交換

アンケートの結果 (事前・事後)

参加者の感想には、「この町ではどのようなことができ、どのようなことをすればよりよい町になっていくのかを常に考えて生活していきたい」や「鷹栖の良さを改めて知った気がしました。日々の生活から活性化について考えてみようと思うきっかけになりました」と前向きな回答があったことから、創生塾を通して「鷹栖町への愛着の度合い」や「鷹栖町のまちづくりの進め方についての理解」がさらに高まったと考えられます。



成果と課題

自ら手を挙げ参加してくれた高校生。理由は様々ですが、十分な可能性を秘めた方が多く、高校 生ならではの本音トークにより、楽しみながら良い雰囲気で初回を終えることができました。少人 数ならではの良さが生かされたように思います。

次回以降、少し具体的に話を進める中で、しっかりと高校生の主体性を生かしていけるよう、大 人たちがサポートし、展開していけたらと考えています。

「ほっかいどう学」地方創生塾(鷹栖町) 1年目 第2回

参加者

令和2年10月4日(日) 15時~17時

鷹栖地区住民センター

旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生5名 (町内在住5名)

内容

「鷹栖町高校生プロジェクト」の第2回は、より深くメンバー同士を知るため、「自分らしいエピソード」や「鷹栖に足りないものは?」などのテーマで、互いに紹介しあうことからスタートしました。その後、鷹栖町出身の札幌の大学生と草野塾長とのトークセッションを実施。塾生にとって、大学生は自分の将来の姿を重ねられる存在であり、またこのプロジェクトが継続した時に塾生自らどう関わり続けられるのか、大学生の経験談を交えた「生の声」を聞く機会となりました。

後半は、「何か企画を考えてみよう」をテーマに、塾長からメンバーの個性・役割を活かした企画立案の進め方を学びました。そして、オープン・スペース・テクノロジーの手法を用いて、塾生のうち3名が、「野外フェス」「外国人との交流」「特産品のトマトジュースレシピコンテスト」という鷹栖町を活性化させるための企画をプレゼン。ほかの塾生やスタッフが3つ企画ごとのグループに分かれ、具現化に向けて、意見交換をしました。

次回はこれらの案の実現に向けて、より具体的な話し合いを進めていくことにしています。



トークセッションの様子

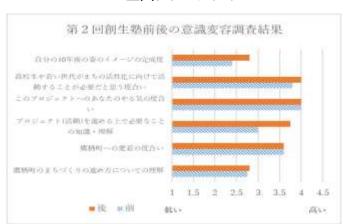


企画プレゼンタイム

アンケートの結果 (事前・事後)

事前と事後のアンケートを比較すると、「プロジェクト(活動)を進める上で必要なことの知識・理解」の数値が 0.75 ポイント上昇した。

塾長と大学生とのトークセッションによるイメージの共有や、オープン・スペース・テクノロジーの手法を用いた企画に関する意見交換、わかりやすい資料があったため、塾生が今後の活動に見通しを持てたものと考えられる。



成果と課題

今回、鷹栖町出身の大学生1名がメンバーに加わりました。第1回開催の3日後に、草野塾長が代表を務めるNPO法人 ezorock の会議に参加したのが縁でした。このプロジェクトをきっかけに、つながりが広がったことも1つの成果だと思います。

企画プレゼンでは、高校生2名、大学生1名から企画案が出されました。高校生の主体性を失わず、これからいかに具現化させていくか、大人たちも真剣に向き合っていきたいと思います。

「ほっかいどう学」地方創生塾(鷹栖町) 1年目 第3回

日 時 会 場 参加者 令和3年2月27日(日) 14時~15時30分 北野地区住民センター

旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生3名 (町内在住3名)

内容

「鷹栖町高校生プロジェクト」の第3回は、新型コロナ感染症拡大防止に向けた集中対策期間ため、久しぶりの開催となりました。上川教育局社会教育指導班の支援のもと、事業を企画・立案するための基本的な知識と技能を学ぶことや、地域で活動する人材を知ることなど、塾生のスキルアップを目指して実施しました。

前半は、教育委員会山本係長から、 前回までの活動の振り返りと「高校生 プロジェクト」に参考となる地域おこ し協力隊員の活動や、移住者が新たな 事業を生み出している事例を紹介しま した。

後半は、上川教育局社会教育指導班の小島主査・佐藤社会教育主事の進行で、「企画会議のプロセス」や「企画の手法」を学びました。その後、自分達の思いや事業のねらい、地域住民など事業に関わる人々のニーズ、地域資源の分析を塾生同士で意見を出し合い、ワークシートにまとめました。

次回は、3月中旬に草野塾長を鷹栖町に迎えて開催する予定です。来年度の具体的な活動を見える化することで、塾生のアイデアの新たな創出と行動力



【グループワークの様子】



【活動の流れを見える化したイラスト図】

やモチベーションを高めるきっかけにしたいと思います。

成果と課題

期間が空いたことで、高校生の事業に対する意欲面での心配もしていましたが、熱心に耳を傾ける姿やワークショップでの様子から、その心配は見事に吹き飛びました。

前半は、地域おこし協力隊を含めた地域の人財 "20 歳代" にスポットをあてて紹介。世代が近い人たちが様々な分野で、鷹栖町で活躍していることは、高校生にはあまり知られておらず、良い刺激になったのではないでしょうか。

後半の学びでは、今後に向けたスキルアップのため、前回出されたアイデアをどう具現化するか、 深く考えられた時間となりました。

「ほっかいどう学」地方創生塾(鷹栖町) 1年目 第4回

日 時 会 場 参加者 令和3年3月13日(土) 14時~16時30分 鷹栖地区住民センター

旭川市内や鷹栖町内の高等学校に通う高校生4名 (町内在住4名)

内容

「鷹栖町高校生プロジェクト」の第4回は、5か月ぶりに 草野塾長を迎え、これまでの活動のふりかえりと来年度の活 動する企画案の作成を行いました。

最初に、教育委員会山本係長から、「よそ者」「若者」の視点から町内で新規事業を展開している地域おこし協力隊員を紹介し、現在鷹栖町では、創生塾生も含めて「若者のチカラ」を求めていることを説明しました。

後半は、第2回に企画の提案があった3つのテーマ「外国人が帰りたくないと思うマチづくり」「オオカミの桃コンテスト」「パレットヒルズで野外フェス」について、企画を具体的に文字に起こすグループワークとプレゼンテーションを行いました。塾長から、事業展開するために大切な手段の1つ、他地域で似たような事例を「まねる」ことや情報収集することなど「先行事例から学ぶ機会」をつくることが必要であることが伝えられた後、シンプルに企画やプレゼンテーションできる「KP法」を用いて、3つのテーマに沿ってグループワークをしました。グループワークでは、町役場の若手職員も加わって意見交流しながら企画案を作成し、全体で共有しました。発表後には、聞き手全員から「Good」「More」の視点で付箋にコメントをもらって終了しました。

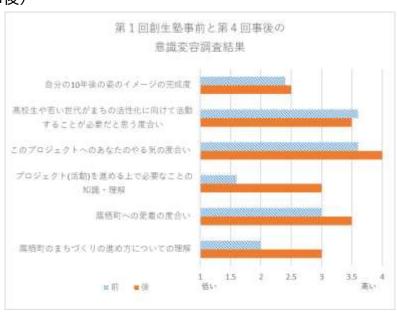




アンケートの結果 (事前・事後)

「鷹栖町のまちづくりの進め方についての理解」「プロジェクト(活動)を進める上で必要なことの知識・理解」が1ポイント以上の上昇が見られたのは、毎回まちづくりに必要な手段を学ぶ機会が行われていたことからと考えられます。

反面、「高校生や若い世代がまちの活性化に向けて活動することが必要だと思う度合い」が若干下がっている要因を今後探っていきます。



2 芦別市(空知管内)

芦別市は、北海道の内陸部にある空知管内に位置し、市域面積は道内第5位の865.04km、そのうち森林が約88%を占める、自然豊かなまちである。その美しい自然と澄み切った空、降るように美しい星がまたたく夜空といった自然環境を活かし、昭和59年12月1日に「星の降る里」を宣言している。

芦別市では明治時代後半には空知の他のまち同様、石炭の採掘が本格化し、最盛期には7万5 千人を超える人口を抱え、大きく発展した。しかし、基幹産業であった石炭産業の崩壊をはじめ、 各産業の低迷と合理化により就業者数が減少し、総人口に占める就業者の比率が低位な状況にある。

令和元年12月末の人口は約1万3千人で、高齢化率は46.5%に上昇している。

(1)モデル事業実施の経緯

学校教育と社会教育を通じて、若者が地域に幅広い繋がりを持ち、自ら問いを立ててその解決 を目指す人材へと成長していく過程を支援することは非常に重要である。

こうしたことから、芦別市におけるモデル事業では、高校生にフォーカスを当て、高校生が地域 の様々な課題を学び、解決に向けた取組を考えることを通じて、地域の担い手となることを目指 す。

実施理由	芦別市の魅力を発見・発掘する取組を通して、地域の担い手を育て		
	たい。		
実施場所	・北海道芦別高等学校		
	・芦別市民会館		
to the table			
参加対象者	芦別高等学校在校生 全生徒中 10 名程度		
事業後の参加者の活	・北海道芦別高等学校が独自に行っている活動(農業まつり、キラキ		
動に対する見通し	ラフェスタへの独自出店等)を全市的に協働・協力できるような体		
動に対する先通し			
	制づくり		
	・Uターンに繋がる取組の展開		
	・国内外観光客の誘致に繋がる取組の展開		
連携予定の機関	北海道芦別高等学校		
講座予定回数	5回(うち講師派遣2回)		
取組イメージ	1年目 ・地域の良さの棚卸し		
月入が丘()			
	<td color="</th" in="" rowspan="2" the=""></td>		

(2) 実施目的

高校生が地域と関わることができる場を設定することで、地元への思いを高めることができ、 生まれた地域の活性化につながる活動を通じて、地域の担い手となる人材を育てる。

(3) 実施主体

芦別市教育委員会

(4) 実施概要

講座名 「ほっかいどう学」地方創生塾「探究活動グループ」

ア 第1回(資料4-5)

実施日時	令和2年9月29日(火)15時40分~17時00分		
会場	北海道芦別高等学校		
参加者	高校生6名		
講師	あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏 Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏		
学習プログ ラム	○ 地方創生塾の趣旨説明○ 地域の実情から活動の方向性について共有		

イ 第2回(資料4-6)

実施日時	令和2年10月13日(火)15時40分~17時40分			
会場	北海道芦別高等学校			
参加者	高校生6名			
講師	あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏			
	Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏			
学習プログラム	○ 地域課題の洗い出しと解決に向けた活動について○ 活動のイメージ化~高校生や地域住民が気軽に集まれる高校生カフェ~			

ウ 第3回(資料4-7)

実施日時	令和2年11月24日(火)15時40分~18時00分		
会場	北海道芦別高等学校		
参加者	高校生5名		
講師	あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏 Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏		
学習プログ ラム	○ 上砂川町の『まちの駅ふらっと』視察の振り返り○ 具体的な活動内容の協議と来年度の取組について		

(5) モデル事業実施の視点

視点1 聞き取り調査等による地域の実情やニーズの把握

ア 活動の内容

【塾生から見える地域の実情について意見交流】

・塾長から「地元の良いところといえば・・・」 や「今、自分たちに何が必要か」、「自分たちが地域でできることは?」という問いかけを もとに意見交流を行った。塾生から「自分で 食べてみた芦別名物」や「現在紹介されていないことを掘り下げた情報発信する」、「ガタタンではなく、無名なものを紹介したい」など多くの希望が挙がった。



【活動の方向性について共有】

・食べ物の話題から「高校生カフェ」はできないのかとの意見に話が集中して、カフェのイメージを共有した。

第1回報告書から抜粋

・「地元の良いところ」に視点を当て、思っていることを交流することで、塾生に「芦別市が こうなってほしい」という視点を持てる展開を目指した。「こういう商業施設や娯楽施設が あればいい」などの意見が出てくる過程を通して、地域の実情を共有した上で、「高校生が これから自分たちや地域のためにできること」という視点で地域のニーズを引き出した。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・年度当初は、まち歩きなどの実地踏査や直接住民の声を聞いて、地域の実情やニーズ調査 を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大により実施できなかった。そのため、事業に関わるメンバーと塾長や塾生が持つ情報を共有する場面を多く設定した。
- ・地域の「負」の実情からではなく、今ある地域のよさに目を向けさせる問いを塾長から投 げかけることで、塾生からは「芦別市にはおいしい果物やスイーツがたくさんあるから、 それを市民が気軽に集まって食べられるところがあったらもっと顔見知りになれると思 う」などの意見が挙がった。

視点2 事業に関わる人との方向性の共有

【塾生から参加した理由の聞き取りから】

- ・上砂川町から通学しているので芦別のよいところを知りたい。
- ・自分が住んでいるところのよさを他の人にも知ってほしい。
- ・長く芦別に住んでいるが、知らないことが多いのでもっと知るきっかけにした い。

【創生塾を企画した芦別市教育委員会担当者の思いの発信から】

- ・高校生には、芦別はもとより近隣地域に住んでいても意外と知らないよいところを再発見したり、大人には見えない高校生の視線で改善すべきところを提案したりして、地元を好きになってもらいたい。
- ・将来地元を離れても、もう一度地元に戻る、離れていても地元を気にかけ地元愛を 持った大人になって欲しい。



第1回報告書から抜粋

ア 活動の内容

【視察の振り返りから活動のイメージを共有】

- ・ホワイトボードに意見をまとめ、模造紙に書き出した。
- ・模造紙には、店名や店の雰囲気、具体的な希望設備、メニューを書き出し、来年 度の活動に向けての土台作りとした。
- ・前回まで抽象的であった提供するメニューに ついては、上砂川町を視察したことと塾長か らのアドバイスから自分たちで商品開発をす ること、市内で販売している菓子をメニュー に取り入れることなど、実現に向けてそれぞ れの思いの共有を図った。



第3回報告書から抜粋

・「自分たちが住む芦別市のよさを伝えたい」「芦別市をもっとよくしたい」という思いは塾 生だけではなく、担当者などの大人にもある。同じ空間と目線で一緒に自分の考えをまわ りに伝え、聞き手も多様な意見を必ず聞き入れる姿勢で話し合う場を繰り返し設けた。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・意欲的な塾生であるため、自分なりのイメージや考えを持っている。そのため、事業当初 のオリエンテーションの場面で、多様な考えを全体で共有することで、お互いの考えを知 り、理解し合う時間を設けた。
- ・塾生の多様な考えをある程度同じ方向に向くように、創生塾を企画した芦別市教育委員会 担当者の思いを伝えることで、塾生が「自分たちは何を求められているのか」、事業の目的 を各自考え、整理できるようにした。
- ・塾生が1つの意見から自分の考えを付け加えていく建設的な話し合う形になるよう、塾長や担当者、担当教諭など塾生と関わる大人たちが、塾生の意見を否定することなくすべて受け止めて、安心して話せる場をつくるなどの配慮をした。
- ・自分やまわりの考えを何度も確認するために、塾生から出た意見をホワイトボードや模造 紙に書き出す見える化を図った。

視点3 継続性のある取組とするための工夫

【前回の宿題から新たな展望を導き出す振り返りの時間を設定】

- ・塾長から出された宿題「芦別に求めるもの」や「『高校生カフェ』に求めるもの」を塾生がどのように考えてきたかを確認し、カフェを開く上での具体的な取組について検討した。
- ・「現在自分たちでカフェをやるとしたら、どのようなカフェが理想なのか」を挙 げた。
- ●落ち着いた雰囲気。子ども連れの人も入りやすく、子どもの遊び道具があり、く つろげるようなカフェ。
- ●外から中が見やすく入りやすいカフェ。場所 も便利な所。
- ・「高校生など多くの世代が気軽に交流できる場所がいいのでは?」と、目的を導き出すことができた。

第2回報告書から抜粋

ア 活動の内容

・各回の終了前には、「振り返り」の時間を設けて、塾長から次回まで調べてほしいことや自 分の考えを整理することなどの「宿題」の提案があり、その回答を次回開始時の「前回の振 り返り」場面で全体交流した。

イ 活動を行う上での工夫等

- ・毎回、事後アンケート内に活動を振り返るための記入欄を設け、自らの学びや心境の変化 を記入することを通して、次の活動への意欲付けや展望を示す機会を意図的に設けた。
- ・次の活動への意欲付けの一方策として、「自分の考えを整理、地域素材の気付き」ができる 「宿題」が塾長から投げかけることがあった。

視点4 テーマ設定の工夫

【塾生それぞれのイメージから具体的なテーマを設定】

- ・具体的に場所とメニュー等について話し合い、「場所は駅の近く」「レジの横にお 土産を置き、『ついで買い』を誘う」「土日ではなく平日に行ける場所」などの話 が出た。
- ・塾生が実際にカフェに行った経験が乏しい ことから、近隣にあるカフェを視察するこ とになった。
- ・まちなかにあり世代交流ができる「カフェ」 を運営している上砂川町の「まちの駅ふら っと」を視察することになった。



第2回報告書から抜粋

ア 活動の内容

・第2回で意見交流した結果、小さい子どもから高齢者まで幅広い年齢層の地域住民が「自分の居場所」「交流する場所」として集い、地域素材を使った食を提供する「高校生カフェ」を開くこととした。

イ 活動を行う上での工夫等

・テーマを設定するにあたり、主体となる塾生の意見を一つ一つ拾い上げ、塾長が丁寧にそれぞれの意見のよさを認めることで、塾生の発想が広がった。

・塾生の意見には、主体となる高校生が楽しくやりがいのあるテーマに設定しつつ、高校生の視点だけではなく地域全体で必要なこと(高校生を含めた居場所「たまり場」づくりや交流の場づくり、今あるものを活用した地域素材「地元店舗で製造されている商品の販売など」の提供)を挙げるなど、地域の活性化につながるテーマ設定を行った。

(6)調査結果

ア 参加者

参加者の事業の実施前後の意識の変容を検証するため、質問紙調査を実施した。質問紙は、 道立生涯学習推進センターの職員が作成した。

各項目は、4件法で実施し、教育効果を検証するため、調査時期である「事前」と「事後」 の平均値を比較した。

調査時期と回答は、第1回事前 (n=6)、第1回事後 (n=6)、第2回事後 (n=6)、第3回事後 (n=5) の計4回である。

調査の結果は、図4-2のとおりである。

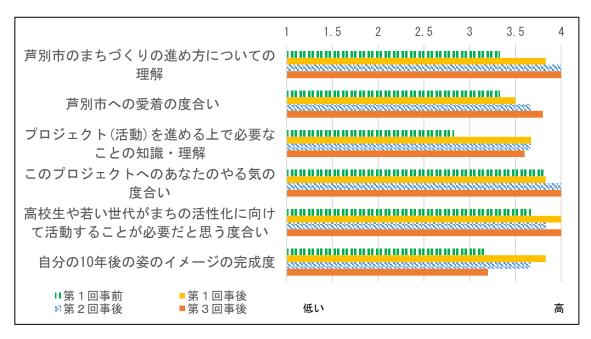


図 4-2 参加者の事前と事後の意識変容調査結果

イ 事業担当者

事業終了後、事業担当者を対象に、記述式のアンケート調査を実施し、以下の回答を得た。 質問項目は、次の3項目である。

- ①担当者の開始前の心境や開始前に準備したこと (塾生に向けての思いや塾生を募集する際の工夫など)
- ②創生塾を行っている時の担当者から塾生への対応(塾生にどのようなアプローチしたか?)
- ③担当者の事業終了後の心境や塾生の変化で気付いたこと

項目	①担当者の開始前の心境や 開始前に準備したこと	②創生塾を行っている時の 担当者から塾生への対応	③担当者の事業終了後の心境 や塾生の変化で気付いたこと
第1回 令和2年 9月29日	声別高等学校の生徒に、地 元はもとより近隣地域の良 いところを再発見したり 人には見えない改善する ところを提案しても好きになり、将来地元を離れてもまた りしながら、地元を好きまた り、将来もるなど地元愛思い 戻ってくなって欲しいと思い 企画した。	塾長と塾生による自由な意見交換を通じて、 話し合いがしやすい環境を作る よう心掛けた。	開始直後は塾生が大人しかったが、後半には雑談を含め楽しそうな雰囲気で話し合いがされ、塾生の意見やこの活動で行いたいこと、各自の得意なことなどをアピールできるようになっていたのが印象的であった。
第2回 令和2年 10月13日	前回の話し合いで出た意見や希望をもとに、より具体的に塾生の発想を伸ばすべく、事前に講師と打ち合わせる場を設けて塾生への投げかける言葉や場の雰囲気の作り方などを確認しながら準備を進めた。	1回目の創生塾で塾長と塾生が自由に話し合える雰囲気ができていたので、前回より話しやすく自由な雰囲気で意見交換するとともに、市の担当者としてのアドバイス(他機関の連携等)が必要な際はすぐに対応できるよう心掛けた。	回を追うごとに 塾長と塾生 の距離が縮まり、気軽に意見 交換できる環境 になってきていると思う。
第3回 令和2年 11月24日	今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、実際に新型コロナックのため、実際にイベンタビューを行ったりりいで、まました。では、ままでは、ままでは、ままでは、ままでは、ままでは、ままでは、ままでは、ま	2回目終了後に、シャックででき、となるい地をはいいが川し協力でできるようでできるい地でであるととなるい地域のでは、	塾生が会体にようなという。 型はの生生をでととすがとなるに、 理想の生生をできるできるのになる。 できることをできまました。 変にはいますがいますがきない。 ないますがきないでは、 を大にくれますがきないでは、 を大にくれますがきない。 できたできますがきない。 できたできますがきない。 では、 ない、ないまでは、 ない、ないまでは、 ない、ないないない。 では、 ない、ないまでは、 ない、 ないまでは、 ない、 ない、 ない、 ないまでは、 ないまでは、 ないまでは、 ない、 ないまでは、 ないないないないないないないないないないないないないないないないないないない

(7) 成果と課題

- ・ 「芦別市のまちづくりの進め方についての理解」と「プロジェクト(活動)を進める上で必要なことの知識・理解」の項目では、塾長が詳しく説明したほか、塾長と一緒に検討し進めていることから、第1回創生塾開始前の調査した数値よりも第2回創生塾終了後の調査した数値が0.5ポイント以上上がったと考える。
- ・ 創生塾開始前からどの項目の数値も高い状況であり、第3回終了時点ではすべての項目の 数値がより高くなっている。短期間に事業展開したことにより、塾生のモチベーションが下 がらなかったことが要因と考えられる。
- ・ 「自分の10年後の姿のイメージの完成度」の項目において、第2回の数値が突出した要因として、この回で事業テーマが定まり、「高校生カフェ」を開くイメージが固まったことで、事業で活動する自分の姿がイメージできたものと考えられる。
- ・ 担当者については、事業当初から一貫して塾生である高校生の率直な意見を引き出すため、 場の雰囲気や関わり方(話し方や聞き方など)には十分配慮して対応している。
- ・ 自由に話し合える環境が整い始めると、多くの意見が出始め、意見を積み重ねながら事業 テーマの設定に至ったことがわかる。
- ・ 塾生が見通しを持って事業に参画できるよう事前事後に打合せを重ねることで、塾長や担 当者の考えが整理できてきている。塾生だけではなく、それに関わる者の成長も見えてくる。

「ほっかいどう学」地方創生塾(芦別市)「探究活動グループ」 1年目 第1回

日 時 令和2年9月29日(火) 15時40分~17時

会 場 北海道芦別高等学校

参加者 高校生6名

<u>塾 長</u> あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏 Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏

内容

芦別市の地方創生塾は、芦別高等学校の1年生6名が参加した。芦 別市と赤平市それぞれで活躍されている元地域おこし協力隊員の新 村・大倉両氏を塾長とし、芦別のまちづくりについて考え行動する取 組がスタートした。まず、塾生から創生塾に参加した理由を聞いた。 【参加した理由】

- 上砂川町から通学しているので芦別のよいところを知りたい。
- 自分が住んでいるところのよさを他の人にも知ってほしい。
- 長く芦別に住んでいるが、知らないことが多いのでもっと知る きっかけにしたい。

次に、今回創生塾を企画した芦別市教育委員会担当者から「塾生には、芦別はもとより近隣地域に住んでいても意外と知らないよいところを再発見したり、大人には見えない高校生の視線でしか見えない改善すべきところを提案したりして、地元を好きになってもらいたい。また、将来地元を離れても、もう一度地元に戻る、離れていても地元を気にかけ地元愛を持った大人になって欲しい」という思いを参加者に伝えた。その後、参加者から「地元の良いところといえば・・・」や「今、自分たちに何が必要か」、「自分たちが地域でできることは?」



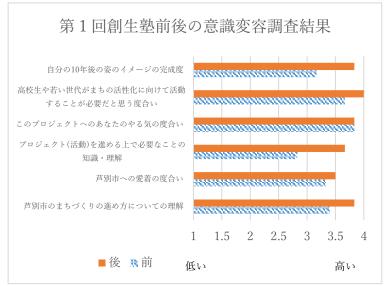


ということについて交流を行った。塾生から「自分で食べてみた芦別名物」や「現在紹介されていないことを掘り下げた情報発信する」、「ガタタンではなく、無名なものを紹介したい」など多くの希望がある中から「高校生カフェ」はできないのかとの意見に話が集中した。最後は、次回 10 月 13 日に向け、塾生が「芦別に求めるもの」「『高校生カフェ』に求めるもの」を考えてくるよう塾長から宿題が出され終了した。

アンケートの結果 (事前・事後)

参加者の事前に聞いた感想には、「うまくいくかどうか不安」「力になれるか不安です。貢献できるか不安」と言った声があがっていたが、自ら立候補して事業に参加したこともあって、事前事後とも「やる気の度合い」が非常に高かった。

今回は、塾長と塾生との意見交流を通して、 高校生の思いを受け止めること、活動の方向性 を共有することを大切にしたことで、プロジェ クトを進める上で必要なことの理解が高まった と考えられる。



「ほっかいどう学」地方創生塾(芦別市)「探究活動グループ」 1年目 第2回

日 時 令和2年10月13日(火) 15時40分~17時40分

会 場 北海道芦別高等学校

参加者 高校生6名

あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏 Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏

内容

第2回地方創生塾は、前回塾長から出された宿題「芦別に求めるもの」や「『高校生力フェ』に求めるもの」を塾生がどのように考えてきたかを確認し、カフェを開く上での具体的な取組について検討することにした。前段で「カフェ」に行ったことのある塾生が6人中2名で、その2名も大手コーヒーチェーン店のみであることがわかった。6人全員が市内の喫茶店には行ったことがない中、「現在自分たちでカフェをやるとしたら、どのようなカフェが理想なのか」を挙げてもらった。

【「どんなカフェにしたいか」など】

- 人が入りやすいカフェ。雰囲気が良い。人が立ち寄りやすい。
- ・落ち着いた雰囲気。子ども連れの人も入りやすく、子どもの遊び 道具があり、くつろげるようなカフェ。
- 落ち着いてゆっくりできるカフェ。
- 外から中が見やすく入りやすいカフェ。場所も便利な所。

以上の意見から、「高校生など多くの世代が気軽に交流できる場所がいいのでは?」と、塾生が感じていることが分かった。

次に、具体的に場所とメニュー等について話し合い、「場所は駅の近く」「レジの横にお土産を置き、『ついで買い』を誘う」「土日ではなく平日に行ける場所」などの話が出たが、前述したとおり塾生が実際にカフェに行った経験が乏しいことから、まずは近隣にあるカフェを視察することになった。

そこで、10月26日に塾生と塾長の大倉氏、市担当者が、まちなかにあり世代交流ができる「カフェ」を運営している上砂川町の「まちの駅ふらっと」を見学し、具体的なイメージを共有することにした。

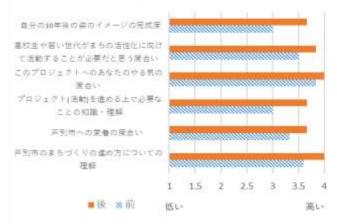


アンケートの結果 (事前・事後)

事前には、「まわりの思いと気持ちが合わせられるかな?」「カフェをするのにどこに店を出したらいいかわかりません」との不安な声があったが、事後は「いろいろな案を出せた」「塾長の助言で自分たちがやることがわかった」と充実感を感じた声があり、回を増すごとに塾生のやる気が高まっている。

2回目の開催ということで、塾長と塾生との距離も縮まり、意見交流しやすい雰囲気になってきた。高校生が自由な発想を発言でき、塾長と活動の方向性を共有できた機会になった。

第2回創生塾前後の意識変容調査結果



「ほっかいどう学」地方創生塾(芦別市)「探究活動グループ」 1年目 第3回

日 時 令和2年11月24日(火) 15時40分~18時

会 場 北海道芦別高等学校

参加者 高校生5名

<u>塾 長</u> あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏 Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏

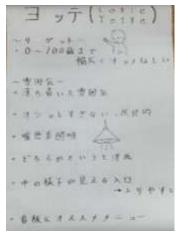
内容

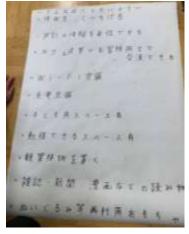
第3回目の芦別市の地方創生塾は、10月に見学した上砂川町の「まちの駅ふらっと」について、各自の感想・意見等を出し合った。 模造紙に店の雰囲気、具体的な希望設備、メニューなどを書き出し、 来年度実施する「高校生力フェ」のイメージを作った。

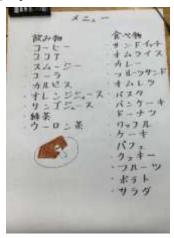
また、前回まで抽象的であった提供するメニューについては、上砂川町を視察したことと塾長からのアドバイスから自分たちで商品開発をするのはもちろん、すでに市内で販売している菓子をメニューに取り入れることなど、芦別らしいカフェの実現に向けてそれぞれの思いを共有した。



次年度は、今年度できなかった塾生自らが地域に足を運んで、地域の実情や住民のニーズの把握、地域イベントの参加を通して地域住民と関わる機会を作ることからスタートしたい。



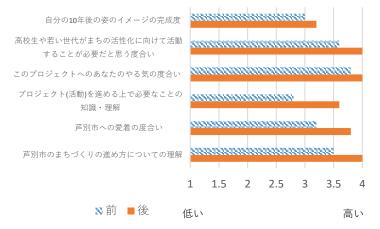




アンケートの結果(事前・事後)

第1回の事前調査に比べ、最終回となる第3回事後調査結果は全項目とも数値が上昇している。特に、事後に記した感想に、「塾長が自分達の意見を受け入れてくれるので、発言しやすかった」や「マチについて考えたり、改善する点に気付きたりすることができた」、「みんなの意見がまとまってきたから、後は全力で参加したい」とあることから、自分達の意見をもとに具体的な活動が見えてきたこと、改めて地域のことを考えることで地域への愛着、取組みに対する意欲が高まったと考えられる。

第1回創生塾事前と第3回事後の意識変容調査結果



3 成果と課題

鷹栖町と芦別市が取り組んだモデル事業について、それぞれの特徴や成果と課題を次のとおりまとめた。

(1) 鷹栖町のモデル事業

モデル	地域単位/地域主導
対象者	・町内在住の高校生及び青年
塾 長	・地元外、1人、若者の地域づくり活動を支援するNPO法人代表 ・多様な地域の事例について熟知しており、外の視点を取り入れた活動が展開 しやすい。
特徴	・基本的に高校の関与がないので、活動の実施に当たっては自治体や地域団体 等、地域の大人が強く関与することが不可欠となる。
成果	・異なる高校同士の交流、地域や地元企業と生徒個人の関わりが特に強くなる 可能性が高い。
課題	・自治体側の企画・マネジメント能力が問われるほか、個別に参加者を集める 必要があり、参加を希望する人がいなければ、活動の持続的推進は難しい。 ・参加生徒の通う高校が複数となるため、活動時間の調整や活動場所の確保も 課題となる。
コロナ対応	・オンラインを中心に開催

(2) 芦別市のモデル事業

モデル	高校単位/地域主導
対象者	・市内の高校に通う生徒
塾 長	・地元、2人(複数)、元地域おこし協力隊員・地域の現状や課題について熟知している上、地元の企業や団体とのつながりが深いため、地域に根差した活動が展開しやすい。・複数の視点から指導助言が可能。・高校生が地元に就職したあとも継続して関わりを持つことができる。
特徵	・自治体(地域団体)が主導することで、地元の企業や団体との体制づくりが 円滑化されるほか、地域の現状や課題が得られやすい。 ・高校の教育活動の一環として取り組まれるので、活動の方針や意志の決定が 簡易であり、生徒にとっても活動場所や時間の確保が得られやすい。
成果	・生徒の成長を目の当たりにした自治体職員(地域団体)の意識の変化、地域と学校の連携・協働による地域人材の育成が期待される。
課題	・自治体側の企画・マネジメント能力が問われるほか、高校の参画がなければ、活動の持続的推進は難しい。 ・教育活動の一つとして認知・承認されなければ実施・継続が困難であり、学校の管理職や担当教諭の理解・協力体制が不可欠となる。
コロナ対応	・市や学校の方針に基づいて活動 ・市内の感染者が多い場合は、活動中止

第5章 モデル発展実践事業

- 1 芦別市における事業の概要
- 2 事業の実施概要
- 3 調査の方法
- 4 調査の結果
- 5 成果と課題

第5章 モデル発展実践事業

1 芦別市における事業の概要

(1) モデル発展実践事業実施の経緯

令和2年度(2020年度)と令和3年度(2021年度)の2年間、芦別市におけるモデル事業では、 高校生にフォーカスを当て、高校生が地域の様々な課題を学び、解決に向けた取組を考えること を通じて、地域の担い手となることを目指すモデル事業を実施した。

しかしながら、コロナ禍において、当初の計画どおりに事業を展開することができず、高校生が 企画したプロジェクトを地域住民に対して展開する機会を十分に得られないまま終了した。

こうした現状を踏まえ、芦別市教育委員会では、令和3年度(2021年度)に市の予算を確保し、 令和4年度(2022年度)において、市の独自事業「芦別市地方創生塾」として活動を継続発展させながら展開することとなった。

本章では、令和3年度(2021年度)から令和4年度(2022年度)にかけて実施された芦別市に おける実践事業について紹介する。なお、資料の一部は芦別市教育委員会から提供していただい た。

(2) 実施目的

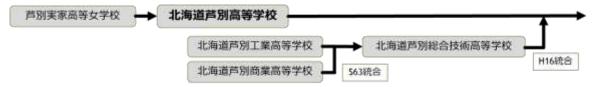
- ・地域の様々な機関や住民等との連携によるワークショップ等の実施を通して、地域活動やま ちづくりに資する人材を育成し、地域の活性化に寄与することを目的とする。
- ・北海道芦別高等学校と連携し、「高校生が放課後に立ち寄れる場所や世代間交流ができる場所 づくり」をテーマとした高校生カフェを実施する。

(3) 実施主体

芦別市教育委員会、北海道芦別高等学校

(4) 実践校の概要

実践事業の実践校である北海道芦別高等学校は、昭和16年(1941年)に設置が認可された北海道芦別高等女学校が前身。昭和23年(1948年)に男女共学となり、名称を北海道芦別高等学校(町立)に変更し、昭和25年(1950年)に道立に移管される。



炭鉱閉山による人口減少やそれに伴う高校の統廃合が行われ、現在設置されているのは普通科 3クラスであり、卒業生の進路も多岐に渡っている。 生徒は、地元芦別市からの入学生が最も多く、近隣の赤平市、滝川市、歌志内市、年度によって は富良野市から通学する生徒もいる。

現在、芦別市内にある高等学校は「北海道芦別高等学校(普通科)」と「星槎国際高等学校芦別学習センター(通信制)」の2校のみである。

ア 生徒の概要 (令和3年度 (2021年度))

- ・生徒数:157名 1年 53名 (男 27・女 26)、2年 51名 (男 21・女 30)、3年 53名 (男 31・女 22)
- ・出身中学校: 芦別中学校 79名、啓成中学校 28名、赤平中学校 47名、その他 3名

イ 進学・就職の概要(令和2年度(2020年度))

- ・進学合格者数 : 計 47名 (国公立大学 1名、私立大学 8名、私立短大 6名、看護学校 12名、専門・各種 20名)
- ・地域別就職状況:計33名(全て道内)
- ・公務員合格者数:計 8名(国家公務員:3名、地方公務員5名)

(5) 事業の展開イメージ

実施された実践事業の展開イメージは図 5-1 のとおりである。高校生が企画するプロジェクト「高校生カフェ」を通して、地域に関する情報発信や世代間交流を促進し、地域の活性化に寄与する人材の育成を目指す。

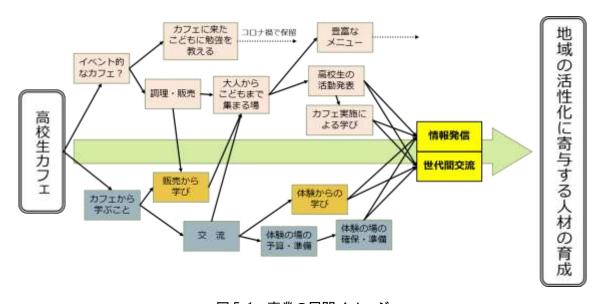


図 5-1 事業の展開イメージ

(6)講師

本事業を実施する上で、塾生に対して指導してもらう講師を選定した。人選については、芦別高校の生徒の大半が、芦別市と赤平市から通学していることや、市外から来た人が地域を見ている新たな視点も取り入れることを重視し、元地域おこし協力隊で地域に残って活動をしている2人に塾長を依頼した。

また、令和3年度(2021年度)において、高校生が企画したプロジェクト「高校生カフェ」を 道の駅の屋外で実施することを検討する中で、調理や販売等に対する助言のほか、保健所への申 請・許可を得る必要があり、専門知識を持つ特別講師を依頼した。

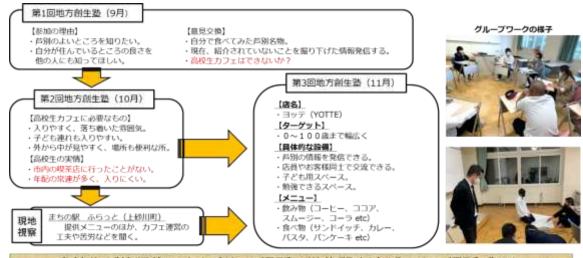
塾 長	あしべつ未来の森協同組合常務理事 新村 充 氏					
	・東京都渋谷区から芦別市に地域おこし協力隊として 2016 年に移住。					
	・芦別市農林課林務係で山の管理や林業等の業務を覚えながら、狩猟免許も取					
	得。任期後は市議会議員として活躍する傍ら、民泊の経営、林業従事者及びハ					
	ンターとしてマルチに活動中。					
塾 長	Ka2 Design フリーデザイナー 大倉 加奈 氏					
	・札幌市出身。「炭鉱まちに住みたい」と赤平市に地域おこし協力隊として 2014					
	年に移住。					
	・現在は NPO などの仕事を掛け持ちしながら空知を中心にデザイナー、ライター					
	として活動中。2020年には民泊系ゲストハウスを赤平市にオープン。					
特別講師	秋田屋旅館 阿部 真久 氏					
	・芦別市出身。 道の駅レストランやスターライトホテルで料理人として勤務を経					
	て、現在は市内で旅館を経営。					
	・芦別青年会議所での活動経験もあり、単に商品開発・販売に留まらない助言や					
	指導が期待できることから講師の依頼に至る(芦別高校OB)。					

2 事業の実施概要

(1) 令和2年度(2020年度)

モデル発展実践事業を実施するに当たって、令和2年度(2020年度)に地方創生塾を3回実施 した。新型コロナウイルス感染症の拡大により、上半期に実施を予定していた取組は全て中止せ ざるを得なかった。取組が本格的にスタートしたのは、9月以降である。

実施した3回の活動内容の概要については、次のとおりである。詳しくは第4章で報告している。



高校生が放課後に立ち寄れる場所や世代間交流ができる場所づくり

(2) 令和3年度(2021年度)

令和3年度(2021年度)の地方創生塾については、7回実施した。この年度も新型コロナウイルス感染症の拡大により、計画通りに事業を実施することができず、何度も延期や中止を余儀なくされた。参考までに、令和3年度(2021年度)に北海道が実施したコロナ対策をまとめた。

- ・新型コロナウイルス感染症集中対策期間(4/8~5/6)
- ・まん延防止等重点措置(5/9~5/31)
- ・緊急事態宣言 (6/1~6/20)
- ・まん延防止等重点措置 (6/21~7/11)
- ・夏の再拡大防止特別対策 (7/12~8/13)
- ・まん延防止等重点措置 (8/14~8/25)
- · 緊急事態宣言 (8/26~9/30)
- ・秋の再拡大防止特別対策(10/1~10/31)
- ・まん延防止等重点措置(1/27~3/6)
- ・まん延防止等重点措置(再延期~3/21)
- ・年度末、年度始めにおける「再拡大防止対策」(3/22~4/17)

このような危機的な状況の中、十分な感染症対策を講じながらプロジェクトの準備を進めた。 高校生が考案したプロジェクトである高校生カフェの実現に向けて、メニューや取組内容につい ての協議、広報に必要なロゴマークやポスターなどのデザインの考案、提供メニューの試作やア ンケート調査の実施など、1年目の取組の経験を活かしながら活動を進めた。

しかしながら、相次ぐ緊急事態宣言等により、計画したプロジェクトは中止となった。残念な 結果とはなったが、市独自として翌年度も継続して事業を実施することが決まり、2月には、市 長及び教育長に活動報告し、高校生のモチベーションは維持されることとなった。

第1回地方創生塾(7月1回目)

高校生の意向を確認から!

- 令和3年度は「高校生力フェ」の実現に向けた活動を行いたい。
- 年間スケジュールの確認
- メニューと実施場所(候補)を高校生に考えてきてもらう。

第2回地方領生数(7月2回目)

10月カフェ実施に向けて、場所を「道の駅」に決定。 新型コロナウイルス感染症を考慮し、屋外で実施。

実施に向けた準備作業

- ○会場となる「道の駅」の施設使用等の調整・協力依頼 (芦別市商工観光津、芦別観光協会(道の駅管理者))
- ○器材のレンタル及び物品の準備
- ○市予算の確保 (9月市議会に補正予算)

第3回地方創生點 (8月)

高校生の役割分担について

○デザイン・広報:ロゴ、チラシ・ポスターのデザイン等

○飲 食 関 係 :提供メニューの決定○企 画 関 係 : 単なるお祭りで終わらない企画・アイディア

第4回地方創生器(10月1回目)

- 令和3年度のカフェ中止、令和4年度の実施に向けた活動 次回以降、試作することを決定
- 年間スケジュールの変更

(関係者に限定した試作会、令和3年度活動の報告会など)

第5回地方創生数(10月2回目)

- ・来年度に向けた試作
- (安全面に気を付けながら、まずは高校生のやりたいように)
- 塾長以外の地域住民の協力

調理等の指導(特別講師):秋田屋旅館 阿部真久 氏

調理場所・器具の借用 建設企業組合 佐藤祐一



特別講師の盛付例



(高校生作成)

第6回地方創生塾(11月)

・試作結果をもとに課題を整理→高校生にアンケート (値段の設定、トッピングなど) -キの大きさや厚さなど完成品のイメージ作り

第7回地方創生塾(12月)

- 前回の課題をもとに高校で2回目の試作
- 販売をイメージしたトッピング、段取りの確認 (売るということは、安定した「味」「形や大きさ」が必要)

活動報告会(2月)

- 市長及び教育長に令和3年度の活動内容を報告
- 高校生の発表に対して、市長及び教育長からコメントをいたださ 新村塾長・大倉塾長を含めて意見交換を実施した。

【実施した意図】

○高校生のモチベーション維持(令和3年度はカフェ本番無し) ○高校生が市長・教育長と話し合う場を作ることで、少しでも 意識を高めてもらう。



焦げを粉砂糖で隠す方法も考えた (もちろん売れないので却下)





まちの話題

ASHIBETSU NEWS

芦高生が芦別市地方創生塾の活動報告を行いました



で芦別高校の生徒5人が芦別市地方 きました。 創生塾の活動報告を行いました。

いを高め、地域の担い手となる人材 放課後に立ち寄れる場所や世代間交 を育てることを目的としています。

令和2年度から2年間にわたり、 新村充・大倉加奈両塾長と共に、ゲ ことです。

2月22日に市役所3階第1会議室 ループワークや校外活動を実施して

活動では、 芦別のお土産ベスト5 地域と関わることで、地元への思 の調査や「高校生力フェ(高校生が 流ができる場所づくり)」を企画し 実現に向けての検討をしているとの

『広報・星の降る里あしべつ 令和4(2022)年4月』に掲載された記事

(3) 令和4年度(2022年度)

令和4年度(2022年度)の地方創生塾については、新しいメンバーを加え、2回のプロジェク トの実施を含めて10月までに9回実施した。

前年度に実施できなかったプロジェクトを6月と10月に、道の駅で実施することができた。



- 新メンバーを含めた顔合わせ
- 令和4年度活動の確認と年間スケジュール作成

第2回地方創生塾 (5月1回目)

カフェのドリンク販売の指導・助言に地元で営業している M's beans 芦別店に協力を依頼し、高校生の前で実演 ドリンクメニューの検討(高校生が作るか含めて)

第3回地方創生塾 (5月2回目)

ドリンクとパンケーキに別れて試作を実施 ポスターデザインの完成

第4回・第5回地方創生塾(6月)

- バンケーキの練習とトッピングの最終確認
- 当日の役割分担等の確認









ア 高校生カフェ 第1回の概要

第1回高校生カフェを6月19日に、道の駅スタープラザ芦別の屋外の特設会場で実施した。 当日までの活動の様子を芦別高校のホームページに掲載されたほか、市の広報誌や生徒が考案 したポスターやチラシ等で周知された。

6月19日(日)11:00~15:00 道の駅屋外スペースで高校生力フェ『ヨッテ』をOPEN!



市長をかなり待たせた後に 購入いただきました 冷や汗・







実施結果

- イベントとしては大成功!
- ・M's beans 芦別店は過去最高売上を記録!

実施結果に対する反省と課題

- ・ストックが開店1時間で無くなり1時間待ちに..
- ・高校生からは、浮かれることなく、多くの反省と改善点が上がる
- ・まずは体験することを重視とはいえ、販売以外の内容検討が必要



龝 北海道芦別高弩校

対抗部級トップ

在农生/信息者向过 中学生向过 (学校紹介)

SERVICE STATES

BOTE NO COSTAN





北海道芦別高等学校のホームページに活動の様子が掲載

高校生カフェ『ヨッテ』のポスター

イベント 広場

食育展示の開催

6月の食育月間の取組として、 食育に関する展示を市立図書館で 開催します。食や健康に関する情 報の展示、パンフレットの配布、 関連図書の貸し出しを行います。 お気軽にご来場ください。

◎期間/6月2日(木)~30日(木) の図書館開館日

◎時間/午前9時30分~午後6時 ◎場所/市立図書館一般閲覧室、 児童閲覧室

※新型コロナウイルス感染拡大状 況により、中止または延期になる 場合は、市ホームページ等でお知 らせします。

●聞い合わせ/健康推准係 **☆**27-7365

観光物産 センター

◆売店からのお知らせ ◎6月は木曜日がお買い得

6月の毎週木曜日は1,000円以 上お買い上げで10%割引します。 (一部対象外商品あり)

●問い合わせ/観光物産センター n23-1437

③松コース/お一人様6,000円 (料理9品)

※送迎パスは市内のみ対応しま

※入浴料は邪涂かかります。 ●問い合わせ/スターライトホテ

N ☎23-1155

星の降る里 百年記念館

◆道写協芦別支部写真展を開催

◎期間/6月1日(水)~26日(日) ◎時間/午前9時~午後5時 ※初日は午後1時から

◎観覧料/同展のみの観覧は無料 ◎休館日/月曜日

※新型コロナウイルス感染拡大防 止にご配慮のうえご来館ください。

◆小中学生向けワークショップ 「あしべつ石炭ものがたり」を開催

小中学生を対象とした、体験型 ワークショップを行います。 市内の炭鉱遺産の見学と、石炭

アートに挑戦。 ◎期間/6月25日(土)

◎時間/午前9時~正午(星の降 る里百年記念館に午前9時までに 集合)

◎人数/10人(先着順)

◎その他/少雨決行します。マス ク着用と歩きやすい服装・靴、飲 み物を持参してご参加ください。

●申込・問い合わせ/早の降る里 百年記念館会24-2121

※新型コロナウイルス感染拡大防 止にご配慮のうえご参加ください。

高校生力フェを開催

芦別高校生が地方創生塾の活動 の一環で高校生カフェ「ヨッテ」 を1日限定出店します。地方創生 塾とは、芦別高校と連携して地域 活動やまちづくりに貢献する人材 を育成し、地域の活性化を目指す 事業です。ぜひお越しください。 ◎日時/6月19日(日)午前11時~ 午後3時

◎場所/道の駅スターブラザ芦別 特設会場

0×==-.... 特製パンケーキ、 YOTTE 各種ドリンク ◎その他/ドリ ンカは M's beans

芦別店の協力を得ています。 ●問い合わせ/社会教育係

#22-3110

『広報・星の降る里あしべつ 令和4(2022)年6月』に掲載された記事

当日の天候は晴れ。気温が高かったため、冷たいアイスコーヒーの売れ行きがよかった。多くの市民が来店し、メインメニューであるパンケーキもすぐに完売した。

企画した生徒は、調理や接客など慣れない作業に困惑しながらも達成感を味わっていた。活動の様子は、次の写真のとおりである。また、当日の様子を各紙が報道した。



















高校生カフェ『ヨッテ』(6月19日)の様子







プレス空知 令和4年6月22日



室

令和4年7月11日



* 総を備ていた。また、次回 ・ 総を備ていた。また、次回 易でくれていて生物は大い 対をあるというなな 班数数は「使れがスムース の機供への改善切や改智の 様ってパンケーキを切さる 優別することができなかっ 中国発生の第二 一個なるとした。まで に行く事 時間がかった たりというないないなった。 しに」なり、世界の影響で あるったければかかってに た。「例究を目標して、環 日本の上げ地路から地域画

たけ、「あくの人に京都して

- 82 -

STATIFIED IN 概として燥光していきた

をおって、今後などほの様 「情報を行ったいの報会と イ 高校生カフェ「ヨッテ」第1回における購入者アンケート調査

カフェの会場で、商品の購入者を対象にアンケート調査を実施した。

調査方法は、パンケーキのパッケージにアンケート用QRコードを印刷したシールを貼り、 スマホ等から回答していただくとともに、必要な人にはアンケート用紙を配付して実施した。 回答結果は、次のとおりである。

購入者数	回答者数	回答率
83	16	19. 27%

1 お住まいはどちらですか

市内	市外
13	3

2 あなたの年代をお選びください

10 代以下	20代	30代	40代	50代	60 代以上
2	1	4	3	5	1

3 今回、何を購入されましたか

コーヒー	コーヒー	アイス	アイスまろや	オレンジ	チョコバナナ	フルーツ
(Ashibetsu blend)	(Bogen)	コーヒー	かカフェオレ	ジュース	パンケーキ	パンケーキ
0	0	2	1	0	6	6

4 購入されたものはいかがでしたか

とても おいしい	おいしい	ふつう	あまりおい しくない	おいしくな い
10	4	2	0	0

5 値段はどう思いましたか

とても 安い	安い	ふつう	少し高い	高い
4	5	6	1	0

6 次の項目のうち、高校生に期待したいものはありますか(複数回答)

項目	人数
世代間交流(年代や年齢の違う人たちとの交流 など)	9
地域活性化 (イベントの参加や開催による地域活性化 など)	9
人材育成(これからの時代を担う人たちの"学び" など)	9
地域への定住(U ターン、I ターンなど など)	6

7 事業評価

とても 良い	まあまあ 良い	ふつう	あまり 良くない	良くない
14	1	0	1	0

理由:

- 暑い中よく頑張っていたと思う。
- ・学生に学びと成長の機会の提供がされているように感じられた。
- ・飲食業を体験することで子供たちの将来の選択肢に繋がることはとても良い試みだと 思った。カフェオレもパンケーキもとても美味しかった。
- ・コロナ禍であまり行事もなく過ごした高校生が、こういったイベントをやることで沢 山の経験をし集客もあり、すばらしい企画だと思う。
- ・企画から当日の準備・運営まで、子ども達が考えて行動し、実施しているとしたらと ても良い事業だと思う。
- ・大人がどの程度関与しているかわからないけど、大人の指示通りに集まって作って売ってという事業なら、評価は下がるかな。
- ・地域の活性化に繋がると思う。
- ・美味しいもの、大好きなんで??
- ・ 高校生たちのイキイキとした姿と地域の方々との関わりができるとても良い企画と思った。
- ・味もとてもいいし値段もいいが、何より高校生の対応がとても素晴らしく頑張ったんだな!と思った。またやるなら是非行きたいなと思った。
- ・芦別高校生皆さんの顔が輝いていた。
- ・芦別が少し元気になった。
- 第二弾もあるといいですね。
- ・高校生も頑張っていてやり甲斐を感じた。
- ・芦別の町も賑わいになるので良いアイデアだと思った。
- ・とても活気があり、高校生が頑張っている姿を見ると、嬉しくなった。
- ・アイスコーヒーの他にパンケーキも2種類購入させていただいたが、どれもとても美味しかった。
- ・高校生のうちに社会に触れることはいいと思う。
- ・味は美味しいが接客を担当する時に「ありがとうございます」と声かけがあるとなお よい。あと、待ち時間が長いので前もってどれぐらい待つか教えたらよいと思う。

8 高校生への主なメッセージ

① メニューに対して

- ○お疲れ様でした!美味しかったです。
- ○パンケーキ最高に美味しかったですよ。
- ○美味しいコーヒーとパンケーキでした。
- ○またこのような機会があれば、是非購入させていただきたいと思います。

② 高校生の活動に対して

- ○企画、準備等大変だったと思います。
- ○暑い中、一生懸命作業している姿は、とても頼もしく思います。
- ○挨拶や対応も元気にハキハキしていて、気持ち良く購入させていただきました。
- ○今回を皮切りにいろんなことにチャレンジしてみてください。
- ○この販売、イベントを通じて更に勉強になった事と思います。
- ○事業実施にあたり、思い通りいった面やいかなかった面など色々あったと思いますが、事業をやり遂げたことは素晴らしく、頭が下がります。
- ○爽やかに対応して頂いてこちらも楽しい気持ちになりました。この経験を忘れず にいて欲しいと願います。
- ○これに満足することなく、芦高生が放課後に立ち寄れる場所ができるように、更 に高みを目指して下さい。
- ○全て 100 点です!味も値段も接客もとても素晴らしかったです!ヨッテにヨッテ みて良かったと思いました!
- ○お互いコミュニケーションをとりながら、テキパキとした様子も素敵でした。
- ○あっという間に高校生活は終わってしまうので、いろいろな経験をして、それぞ れの未来に繋げていってくださいね。
- ○皆さん方の明るい未来を応援しています。
- ○色んなことに興味をもって、色んなことに挑戦をして自分の可能性を広げていってください。その経験は必ず皆さんの力になります。挑戦することは怖いかもしれませんが一歩踏み出したら「あれ?なんでこんなにビビってたのかな?なんてことないじゃん!」と思うことの方が多いものです。その「なんてことないじゃん!」という経験も沢山してほしいなと思います。失敗したって次に同じ失敗をしないように何が悪かったのかを考えて対策をとれば何も問題はないんです。そうしていくことで強く成長していけると思います。みなさんが最高の人生を送るために、心の片隅でもいいので挑戦の意義というものをおいておいて下さい。

③ 地域の活性化に向けて

- ○長いコロナ禍での自粛が開け始め、賑わいを取り戻しつつある芦別の姿に、大変 な喜びを感じました。これも高校生の皆さんのお陰です、誠にありがとうござい ました。
- ○芦別のためにありがとうございました。

第6回地方創生塾 (7月)

- ・第1回高校生力フェの振り返り
- ・当初のテーマである「世代間交流」「情報発信」について 各グループで話し合い

第7回地方創生塾(10月1回目)

- 第2回高校生カフェに向けた準備
- 当日会場で発表用動画の視聴し、感想と改善点を

ただ同じ内容で販売だけしても、当初のテーマから遠のく 高校生が自分達で探し、特産品のPR動画を作成 ※高校生の目線で発表する(情報発信)

第8回地方劍生鹽(10月2回回)

ドリンクメニューの再権認 M's beans 芦別店の開店… 今エのドリンクを高齢生せ自分達をやりたい

全てのドリンクを高校生は自分達でやりたい! →対応しやすさからフレンチブレス式でやってみよう! ・前回の反省をもとに、当日の役割分担を最終確認







メリット : 技術的な差が少ない デメリット: 微粉 (コーヒーの粉) が残る ※器具で抽出後、フィルターで連す方法もあり、 ほぼ散粉の心配は無いが、多少薄く感じる





ウ 高校生カフェ 第2回の概要

第2回高校生カフェを10月22日に、道の駅スタープラザ芦別の屋外の特設会場で実施した。 6月に実施した第1回カフェの経験を踏まえ、スムーズに運営された。

また、高校生の活動発表として、グループで市の特産品を紹介する動画を作成し、商品の待ち時間を活用して来場者に見ていただいた。市の特産品を紹介する2~3分のショート動画で、さくらんぼジャム、モカ大福、ガタタンラーメン、はちみつをPRした。

さらに、過去2年間の活動内容を展示物にして掲示するとともに、テレビモニターを設置して、活動の様子を撮影した写真をスライドショーで見られるようにした。

10月22日(土)10:00~14:00、 道の駅屋外スペースで2回目の高校生カフェ『ヨッテ』をOPEN!



今回も大盛況!



実施結果

- ・高校生から元気をもらえる!と高評価
- ・アンケート結果も事業継続の希望が多数あり

実施結果に対する反省と課題

- ・今回も1時間待ちの行列を作ってしまった
- 全体としては前回よりもスムーズだったが、自分のことで精一杯?





第2回高校生カフェ『ヨッテ』のポスター







北海道通信 令和4年11月9日



- エ 高校生カフェ「ヨッテ」第2回のふりかえり
 - 1 販売結果
 - · 収入 55,100 円 支出 41,596 円 = 13,504 円
 - 2 アンケート結果 n=33

カフェの会場で、商品の購入者を対象にアンケート調査を実施した。

調査方法は、第1回と同様、パンケーキのパッケージにアンケート用QRコードを印刷したシールを貼り、スマホ等から回答していただくとともに、必要な人にはアンケート用紙を配付して実施した。回答結果は、次のとおりである。

購入者数	回答者数	回答率
64	33	51.6%

項目	良い/あり/ した	普通/なし/ わからない	悪い/ していない
高校生の活動発表の感想は良かったか	29	2	0
高校生カフェの感想は良かったか	30	2	0
高校生にやってほしい企画はあるか	18	9	-
前回と比べ成長しているか	9	21	0
味に問題はあったか(すでに食べた方のみ)	8	0	0

- ・メニューを追加してほしい、飲食スペースがほしい
- ・高校生が頑張っている姿に好感が持てた

3 集客効果

・例年、10月の道の駅の入込数は右肩下がりだが、10月の4週目で増加しているのは、 「高校生カフェ」による可能性が高い。

	1週目	2週目	3週目	4週目	5週目
入込数	3,052人	2,870人	2,291人	2,757人	1,725人

4 成果

• 販売結果

高校生カフェは、営利目的ではないため、売上の金額は問題ではないが、飲食店が同じ 結果だとしたら時給 240 円の計算となる。

アンケート結果

回答結果の大半が好評価(回答率 51.6%)であった。ただし、「高校生にやってほしい 企画はあるか」の質問に対し、「なし」が 9 件あり、さらなる期待は薄い可能性がある。

- 集客効果
 - 一定の集客効果の可能性があったと思われる。

(4) 事業の成果

本事業に参加した学校にとっては、これまで地域と連携したいという願いはあっても地域とのつながりが薄かったが、本事業を通して地域と連携した取組とすることができた。

行政にとっては、町立の小中学校とは連携することはあっても、道立高校との連携は少なく、 今回の事業を通して、地域活性化に寄与する人材の育成や地元の高校を支援することができた。 講師として関わった塾長の2人にとっては、学校や高校生との接点が少ない中、「地元を知っ てもらいたい」「地元を好きになってもらいたい」「高校生と何かしらの活動をしたい」という思 いの実現につながる事業となったことは大きな成果である。

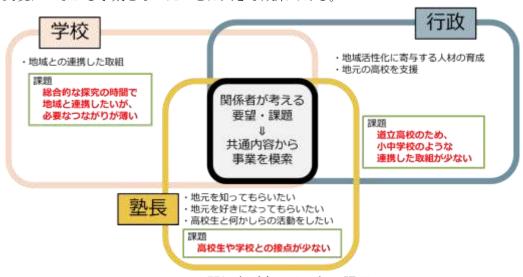


図 5-2 関係者が考える要望・課題

3 調査の方法

(1)調査対象者

令和3年度(2021年度)と令和4年度(2022年度)の事業に参加した芦別高校の生徒を対象に アンケート調査を実施した。

また、高校の担当教諭と市の教育委員会担当職員に対して、事業実施後、記述式のアンケート調査を実施した。

(2)能力の測定

調査方法として、森口ら(2008)が作成した「ヒューマンコミュニティ創成マインド(以下、HC 創成マインドとする。)評価尺度改訂版」を用いた。

※森口竜平・日潟淳子・小山田祐太・齋藤誠一・城 仁士「ヒューマンコミュニティ創成マインド 評価尺度改訂版の開発」神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要 3、2008 年

HC 創成マインドは、他の大学や他の研究領域の研究者、あるいは地域・ NPO・行政・企業と協働することができる資質として「コミュニケーション能力(4項目)」「ネゴシエーション (交渉)能力 (5項目)」「プランニング(企画立案)能力 (6項目)」「マネジメント能力 (7項目)」「リーダーシップ能力 (5項目)」の5つの因子によって構成されている (表 5-1)。

これらの項目は、本事業のねらいである「高校生が地域の様々な課題を学び、解決に向けた取組を考えることを通じて、地域の担い手となることを目指す」内容と共通するものも多く、高校生の能力を測定する上で適切であると判断した。

HC 創成マインドに関する項目は、「よく当てはまる(4点)」から「まったく当てはならない(1点)」までの4件法で実施した。

(3)調査時期・方法

調査は、事業開始時と終了時に、学校で調査用紙を配布し、全て記名式にて回答を求めた。

(4) 集計·分析

「HC 創成マインド」の得点として 27 項目の合計値を 4 件法で算出し、5 つの上位能力の得点についても能力ごとに合計値を算出し、各調査時期における平均値を算出した。

HC 創成マインド (得点 $27\sim108$ 点) の各因子の得点範囲は、リーダーシップ能力が 5 点から 20 点、マネジメント能力が 7 点から 28 点、プランニング能力が 6 点から 24 点、ネゴシエーション能力が 5 点から 20 点、コミュニケーション能力が 4 点から 16 点である。

表5-1 ヒューマンコミュニティ創成マインドを構成する5因子27項目

構成因子	項目
	集団で行動するときに先頭に立ってみんなを引っ張っていくことができる
	メンバーに対して的確な指示が出せる
リーダー	自分が行動を起こすことによって,周りの人を動かすことができる
シップ能力	私は初対面の人でも気軽に話すことができる
	自分の意見を相手に伝えることができる
	相手の話を積極的に聴く姿勢をとることができる
	メンバーに対して、受容的、肯定的な態度をとるよう心掛けている
マネジメント	周囲の人や物事との関係を理解できる
能力	メンバーの失敗に対して責任を持つことができる
HE /J	自分の置かれた環境・状況をよく理解している
	周りの人々の役割と自分の関係をよく認識している
	自分に課せられた役割や使命をしっかりと自覚している
	何かに取り組む際に、先を見通して計画を立てることができる
	取り組むべき課題を明確に分析している
 プランニング	さまざまな情報源から情報を集め、それを活用することができる
能力	数多くの情報の中から、本当に自分に必要な情報を吟味し、手に入れることができる
	仕事をするときに、順序立てて何をどうやって取り組んでいけばよいかを決めることがで きる
	目標達成の手段・方法を考え確実に進めていくことができる
	相手と自分の意見が食い違った場合、相互に有益な妥当点を見出せる
	相手の要求を考えて、自分の提案を修正できる
ネゴシエー ション能力	相手と自分の意見が異なっていても、話し合いを重ねる中で意見の折り合いをつけることができる
	交渉相手の感情を逆なでせずに、合意の達することができる
	相手の要求が自分の意図に反しても,平常心で柔軟に対応できる
	論理的に自分の考えを述べ、相手を納得させることができる
コミュニケー	相手が納得できるように話すことができる
ション能力	相手の質問に対して的確に答えることができる
	自分のことを理解してもらえるように話すことができる

4 調査の結果

調査時期である「事前」と「事後」の平均値を比較した。その結果、参加した高校生の「HC 創成マインド」を構成するリーダーシップ能力とプランニング能力、マネジメント能力において平均値に変容が見られた(図 5-3、図 5-4)。

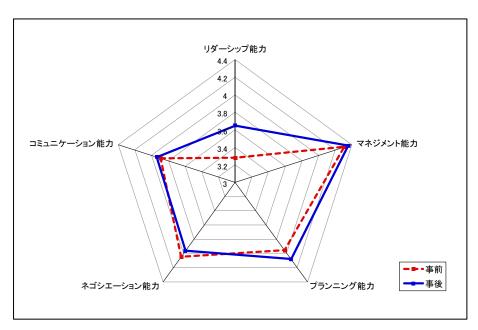


図 5-3 令和 3 年度 (2021 年度) における ヒューマンコミュニティ創成マインド尺度得点の変化 (n=12)

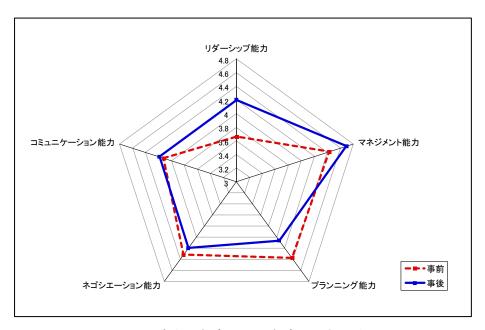


図 5-4 令和 4 年度(2022 年度)における ヒューマンコミュニティ創成マインド尺度得点の変化(n=10)

(1) リーダーシップ能力

リーダーシップ能力は、仲間との信頼関係を築けることを土台としており、メンバー相互の信頼感が重要になる。

本事業では、参加した高校生が、仲間と協力しながらカフェを企画する上で、役割を分担しながらグループごとに話し合いをしたり、事前の準備をしたりする場面が多くあった。各グループのリーダーについては、メンバーに対して的確な指示を出すことや先頭に立って周囲を引っ張っていくことが求められる。

また、カフェ当日は、客への対応として、仲間と協力しながらカフェを運営する場面が多くあり、特に、客との対応では、初対面の人とも話せる能力や自分の意見を相手に伝える能力が求められる。これらの経験が、参加した高校生のリーダーシップ能力を高める要因になったと考えられる。

(2) プランニング能力

プランニング能力は、情報を集め、課題を明確にし、その課題を克服するために計画を立てる能力である。

本事業では、高校生自らが仲間と話し合いながらプロジェクトを企画するという設定で、地域の実情やニーズの把握から、テーマの設定、そして事業に関わる人との方向性を共有するなど、仲間と協力しながらプロジェクトに必要な準備を行う必要があり、先を見通して計画を立てることや順序立てて何をどうやって取り組んでいけばよいかを決めること、また、目標達成の手段・方法を考え確実に進めていく能力が求められる。このような経験が、高校生のプランニング能力を高める要因になったと推察する。

しかしながら、令和4年度(2022年度)調査では、数値が下がっている。これは、前年度に企画したテーマや内容を継続して実施したことから、事業の主な内容が、プランニングよりも運営方法等に移行したことが要因と考えられる。

(3) ネゴシエーション能力とコミュニケーション能力

今回の事業では、ネゴシエーション能力とコミュニケーション能力については、事前と事後で 大きな変化は見られなかった。

外部などの関係機関との交渉や調整等については、高校生ではなく、教育委員会職員や高校の 教員など大人が役割を担っていたことから、高校生が他者とコミュニケーションを図りながら業 務を遂行する場面がほとんどなかったからと考えられる。

(4)マネジメント能力

マネジメント能力は、状況及び時間を把握して管理し、それらを調整しながら再統括する能力である。

令和3年度(2021年度)調査ではほとんど変容は見られなかったが、令和4年度(2022年度)調査では、事前よりも事後の方が上回っている。これは、プロジェクトを実施する上で、高校生自らがカフェを企画したり、運営したりする機会があったためと推察する。

(5) 担当者の感想

ア 高校の担当教諭のコメント

3年前に「地域創生塾」の協力の依頼があり、現在の3年生の学年から、「探究活動グループ」を募り、6名のメンバーでスタート。地元講師2名に指導いただきながら、芦別市や赤平市の「いいところ」を講演してもらい、探究の授業のグループワークを通し、ブレインストーミングなどをし、データを収集し、高校生が芦別市に何を求めているかを探った。①学校帰りにくつろげる店がほしい。②世代間交流をしたい。③芦別のいいところを情報発信したい。という意見がまとまり、「高校生カフェ」をつくり、その場所としたい。というのが1年目の活動の企画案として提案された。

2年目は、2年生6名、1年生7名の13名で、「高校生カフェ」の実現を目指す1年だったが、<u>コロナ禍のため実現されなかった。しかし、準備に十分時間をかけることが出来た</u>ので、メニューを決定。値段を決定。パンケーキの試作を繰り返した。また、時間があった分、ロゴの作成。ポスターの作成に時間をかけることが出来た。

3年目は、2年生の探究ゼミ活動のメンバー14名を中心に、3年生に手伝ってもらいながら、6月19日の出店に間に合わせるように準備を進めた。

授業に、芦別市教委の方、講師2名、Msコーヒーの方、秋田屋旅館の方などに来ていただいて、パンケーキの調理の指導やハンドドリップコーヒーのいれかたなどを指導いただいて、開店に備えた。生徒同士で話し合う時間よりも、出店のために、調理の技術を上げる時間が多くなってしまったが、様々な分野の社会人と触れあうことで、実感しながら学ぶことは多かったようだ。

空知プレスに出店まで2回記事を掲載していただき、授業での生徒の活動がこのように注目されていることに嬉しく感じた。

当日は、食材やテントなどの資材は芦別市教委で準備していただいて、9時から生徒13名と テント張りから準備し、久しぶりにお祭りをしているような楽しさがあった。

10 時から調理の準備を始める予定が30分調理開始が遅れた分、開店時のストックが少なく、すぐ30分待ちの状態になってしまった。

注文をいただいてから、調理して箱詰め、提供という流れがスムーズに行くまで1時間ぐらいかかったが、初めてチャレンジすることなので、お客さんは温かい目で見てくれていて生徒は大いに助けられた。

不慣れな生徒達ではあったが、開店中、元気よく各担当をこなしていた。

途中、休む時間を生徒一人 15 分程度しかつくれなかったが、15 時の閉店時間まで元気よくやれたことに、よく頑張ったと感じた。後片付けもみんなで協力して無事終わることが出来た。最後に記念撮影をした時の生徒の充実感にあふれた笑顔が印象的だった。

生徒の感想を聞くと、接客や品物の提供までの改善点が多かった。担当教員としては、<u>当初の</u>「世代間交流」「情報発信」という部分を、今後生徒の課題として探求していきたい。

イ 市教育委員会の担当職員のコメント

令和4年度から市の独自事業となり、また、芦別高校2年生の「総合的な探求の時間」に設けられたゼミの1つである「地方創生ゼミ」において、芦別市地方創生塾として実施しているが、塾長を中心に進めつつ「高校生の意見を中心とした取組」や「大人が教えすぎない」を関係者の共通認識としている。

本年(2022年)6月、第1回目の高校生カフェを実施したが、<u>販売そのものが目的ではなく、</u> <u>販売を通して地域の住民等と交流を図りながら、企画から販売まで体験し、反省や改善点を考え</u> る機会として実施したところである。

今回、第2回目の高校生カフェでは、高校生が考えた反省や改善点を実践できる場として実施 したが、結果的にも<u>高校生が自主的に動く場面が増えた</u>ように見受けられた。今までの高校生の 印象として、ただ言われて行動しても実感に乏しいが、<u>自らの責任と裁量において行動すること</u> に多様な発見があったものと伺えた。

芦別高校とは来年度以降も継続していく見通しとなっているが、現在の1年生が対象の予定であること、計2回の高校生カフェでは想像以上に集客があったことから、屋内で開催した場合に対応が可能か、当初のテーマである「世代間交流」や「情報発信」をどのように実施していくかなど、塾長及び学校等の関係者と改めて協議する必要があると思われる。

5 成果と課題

(1) 成果

本事業の成果として、次の3点が挙げられる。

第1に、本調査研究の結果から、実施したモデル実践事業について、高校生のリーダーシップ能力をはじめ、プランニング能力、マネジメント能力が向上するという可能性が示唆された。これらの能力は、本事業がねらいとしている能力でもあり、本実践に一定の教育効果があることが明らかになった。但し、本事業は1年間という長期にわたる取組でもあり、その間、参加した高校生は、日常生活において、本事業以外の様々な活動にも参加されており、一概に本事業による成果と判断することはできないため、あくまでも参考値に止める必要がある。

第2に、令和2年度(2020年度)に道立生涯学習推進センターの事業としてスタートした本事業によって、事業実施の推進体制が構築され、芦別市の予算の確保により、市独自の事業として継続実施したことである。予算活用の際には、社会教育振興費として補正予算(財源充当)で対応することとなり、令和4年度(2022年度)は、「芦別市地方創生塾」として実施することができた。

今後も、市教育委員会が、高校と連携しながら、事業を継続実施することは、大きな成果に値する。

第3に、コロナ禍において、事業の開催方法を工夫しながら高校生が発案したプロジェクトを 実現できたことである。令和3年度においては、コロナ禍により、高校生が企画した「高校生カフェ」を屋内で実施することにはリスクが高いことから、密になりやすい屋内ではなく、屋外での実施を候補として検討し、結果的に道の駅の屋外での開催を実現することができた。

(2)課題

今後の課題は、参加者である高校生に対する教育効果だけでなく、事業の実施目的の一つである地域活性化の効果という側面から活動内容を評価することである。高校生が企画したプロジェクトが、地域の実情やニーズに合った取組内容なのか、地域の課題解決に効果をもたらすプロセスや手段なのか等を検証する必要がある。

また、調査方法の在り方について検討する必要がある。今回は、コロナ禍において活動に制限がある時期が続き、事業が計画通りに進まず、活動がスタートしてからアンケート調査を実施したため、事前と事後の変容にあまり大きな差が見られなかった。正確なデータを収集するためには、アンケート調査を事業の実施前に実施する必要がある。

さらに、量的な調査だけではなく、生徒の感想など質的な調査も併せて分析する必要がある。本 事業は複数回開催されたが、その全ての回に参加した生徒は多くない上、生徒会等の活動を兼務 している人も少なくなく、それらの活動内容によって、生徒が身に付ける能力やスキルは左右さ れるであろう。学校の生徒を対象にした長期にわたる活動を実施する場合、調査方法について工 夫が必要と考える。

資料

- 1 令和4年度生涯学習推進体制の整備状況調査票
- 2 令和4年度生涯学習に関する住民の意識調査票
- 3 ほっかいどう学地方創生塾実施要領
- 4 令和2年度ほっかいどう学地方創生塾開催要項
- 5 令和3年度ほっかいどう学地方創生塾開催要項
- 6 令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事前アンケート用紙(鷹栖町)
- 7 令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート用紙(鷹栖町)
- 8 令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事前アンケート用紙(芦別市)
- 9 令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート用紙(芦別市)
- 10令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート用紙(参加者用)
- 11 令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート用紙(担当者用)
- 12 令和3年度ほっかいどう学地方創生塾アンケート用紙

R4.6.1現在

【入力に当たっての留意事項】

1	令和4年6	月 1	日現在の状況を入力	ください。
---	-------	-----	-----------	-------

- 2 このセル (網掛け) のみ入力してください。前年調査から修正する部分は<mark>赤字</mark>で表示してください。 3 行・列の挿入はしないでください。前年入力済の欄を空欄とする場合はセルの色を黄色に変更してください。 4 項目によっては、ドロップダウンリストで選択する場合があります。

I 各種宣言について

	有無	宣言の名称	宣言年度
1 「生涯学習推進のまち」など、生涯学習の推進に係る宣言			
2 「生涯スポーツのまち」、「健康づくりのまち」などの推進に係る宣言			

Ⅱ 各種構想・計画の策定状況について(各項目最大3つまで)※ホームページに掲載がある場合はURLを欄外右に記載

		有無	構想・計画等の名称	施行年度	終了年度
1	生涯学習の推進に向けた構想・計画(基本構想・基本計画等)	13 ///	HAS HE GOVERN		1 1 1 1 1 2
2	社会教育の推進に向けた構想・計画(中期計画・単年度計画等				
3	スポーツ活動の推進に向けた構想・計画				
٥	スパーノ冶剃の住座に凹りた構造・計画				
4	文化芸術活動の推進に向けた構想・計画				
5	読書活動の推進に向けた構想・計画				
6	その他の構想・計画等				

Ⅲ 生涯学習推進に係る附属機関・外部組織等の設置について

	有無	組織等の名称	人数	設置根拠
1 生涯学習審議会				
2 社会教育委員の会議				
3 スポーツ審議会				
4 文化審議会				
5 その他の生涯学習推進に係る外部組織等				

Ⅳ 生涯学習推進に係る行政組織・体制等について

	有無	組織等の名称
【1 生涯学習課、社会教育課等、教育委員会の所管部署		
2 首長部局で生涯学習を所管している場合の所管部署		
3 生涯学習推進本部・会議等、行政内の連携を促進する組織・会議等		
4 生涯学習推進センター等、調査・研究機関		

Ⅴ 子供たちを支える生涯学習活動の取組について

※「主な取組や事業」は代表例や特徴的なものを1つ入力してください。

	孝	教育委員会		首長部局	関係	団体・民間等
	有無	主な取組や事業	有無	主な取組や事業	有無	主な取組や事業
1 子供たちに対する自然体験、ボランティア等の体験活動の機会						
2 読書環境の整備や読書活動を支援 する人材の育成などの取組						
3 子供たちが異年齢・異世代とつな がる場などの居場所づくりの取組						
4 地域住民が学校教育や放課後活動 を支援する取組						
5 望ましいメディアへの接し方やコ ミュニケーションなど、子供たち の今日的な課題を学ぶ機会						
6 子育てや育児に関する学習の機会						
7 アウトリーチ型の家庭教育・子育 て相談などの取組						
8 家庭教育サポート企業と連携して 実施する家庭教育を支援する取組 (子育て環境づくり等)						

※「主な取組や事業」は代表例や特徴的なものを1つ入力してください。

坎门	て的誄題寺に関する子省機会につい			心で手木」		のを「ラスカしてください。	
			教育委員会 首長部局			関係団体・民間等	
	-mit. 00 1 4 W 33	有無	主な取組や事業	有無	主な取組や事業	有無	主な取組や事業
1	環境に関する学習 ・地域の自然環境やその保全、 「木育」など						
2	食に関する学習 ・「食育」や食をとおした地域の 活性化など						
3	国際理解に関する学習 ・諸外国の人々とお互いの文化、 習慣等の理解など						
4	超高齢社会に関する学習 ・生活習慣病の予防、日常の介護 など						
5	防災に関する学習 ・自然災害等の危険性や安全な行 動など						
6	男女平等参画に関する学習 ・女性の人権尊重やハラスメント など						
7	安全・安心な生活に関する学習 ・疾病、犯罪、交通事故等の生 命・健康や防犯ボランティアなど						
8	消費生活に関する学習 ・悪質商法、訪問販売、金融など						
9	人権に関する学習 ・ドメスティックバイオレンス、 児童虐待、ネットトラブルなど						
10	障がい者福祉に関する学習 ・福祉制度や福祉のまちづくりな ど						
11	地域活動に関する学習 ・ボランティアや地域活動など						
12	子どもの貧困に関する学習 ・家庭が抱える経済や生活環境、学習 機会の格差の問題など						

- Ⅷ 障がい者の生涯学習の推進について
- (1) 貴教育委員会の域内で住民が参加できる障がい者の生涯学習活動に関する以下の情報を収集・把握していますか。 該当するものにO

情報を収集・把握している 情報を収集・把握していない

(2) (1)で「把握している」と回答した場合、下記で該当するものを選択してください。 (複数回答可)

		該当するものに〇
1	教育委員会の主催事業(出先機関が主催するものを含む)	
2	首長部局の主催事業	
3	教育委員会が後援・関与する事業	
4	国が行う事業	
5	都道府県が行う事業	
6	特別支援学校等の学校による事業	
7	大学等による事業	
8	その他(社会福祉法人、NPO法人、民間企業等)	

Ⅷ 生涯学習推進上の課題について

	課題項目	程度	
1	住民の生涯学習に対する意識やニーズの把握		5 極めて重要である
2	住民に対する生涯学習の普及・啓発		4 重要である
3	行政職員に対する生涯学習の普及・啓発		3 どちらともいえない
4	生涯学習担当職員の増員や予算の増額などの人的・物的整備		2 あまり重要ではない
5	生涯学習を推進する施設や設備の整備		1 全く重要ではない
6	学習情報の提供や相談体制の整備		
7	生涯学習推進協議会等、生涯学習を推進する住民組織の整備・充実等		
8	生涯学習推進本部等、生涯学習を推進する行政内組織の整備・充実等		
9	学校・家庭・地域の連携の促進		
10			
11	生涯学習指導者やリーダー的人材の養成		
12	生涯学習を推進する団体・サークルの育成		
13			具体的に記入ください
14	その他		

令和4年度(2022年度) 生涯学習に関する住民の意識調査



生涯学習とは…

「生涯学習」とは、一般には人々が生涯に行うあらゆる学習、すなわち、学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など、様々な場や機会において行う学習の意味で用いられます。また、人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択し学ぶことができ、その成果が適切に評価される社会を指すものとして、「生涯学習社会」という言葉も用いられます。(文部科学白書2018より引用)

アンケート調査にご協力をお願いいたします。



® アンケートフォーム

このアンケート調査は、Googleフォームによる回答が可能です。左のQRコードをスマートフォン等で読み込むことにより、アンケートフォームから同じ調査に参加いただけます。

ウラ面を見ながら回答してください☞

北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課



学校での勉強も、いろいろなスポーツに挑戦することも、会社でスキルアップのために研修を受けることも、キャンプなどの自然体験も、地域清掃や防犯パトロールなどのボランティア活動も、習い事、将棋や囲碁などの趣味活動も、読書や家庭での勉強も、すべて生涯学習です。生涯学習は、知識の習得、能力の向上などによる自己実現のためだけでなく、生きがいや心の充足、充実したゆとりある生活を創出するために自ら学ぶことも含んでいます。上に挙げた様々な活動は、生涯学習のほんの一部です。

学校教育も、社会教育も「生涯学習の一部」

生涯学習は、わたしたち一人一人が自らすすんで行うことを基本とするものです。

生涯学習は、できるだけ自分にあったやり方を選びながら生涯を通じて行うものです。

生涯学習は、学校や地域社会の中で行われるだけでなく、様々な機会に行われるスポーツ活動、文化活動、趣味、レクリエーション活動、ボランティア活動なども含むものです。

今回のアンケートは、この1年間の中で「何かひとつでも生涯学習活動をしたことがあったか」をお伺いするところから始まります。「生涯学習」だと意識せずに活動していても、振り返ると、「生涯学習」に当てはまるものだったということもあります。この1年の自分の活動をゆっくり振り返りながら、アンケートへのご協力をお願いいたします。



₫アンケートフォーム

生涯学習に関する住民の意識調査 「調査票]

<調査の趣旨>

このアンケートは、**普段、皆さんが生涯学習についてどのようなお考えをおもちになっているかを調査**することにより、**北海道らしい生涯学習社会の実現に向けた施策の方向性等を検討するための資料**とするものです。 御多忙中のところ、誠に恐縮ですが、本調査の趣旨を御理解いただき、率直な御意見をお聞かせくださいますようお願い

申し上げます。

<記入に当たってのお願い>

- お答えいただく方のお名前や住所などは、記入する必要はありません。
- 質問には、回答を<u>1つだけ選んでいただく質問</u>、複数選んでも構いませんが、<u>回答数が制限されている質問や回答数</u> に制限のない質問がありますので、注意してください。
- 回答の際は、質問ごとに用意した選択肢の中から、あなたのお考えにあてはまる選択肢の**番号を〇印で囲んでくださ** <u>い</u>。「その他」に〇印をつけた方は、()内に具体的な内容を記入してください。
- 一部の方だけに答えていただく質問もありますが、その場合は説明文がありますので、指示にしたがってお答えくだ さい。

<調査票の御返送について>

■ 回答を御記入いただいた調査票は、記入漏れのないことをお確かめの上、市町村(教育委員会)の担当者にお渡しください。(お名前や住所の記入は不要です。)

<使用目的と調査票の破棄>

- この調査票に記入された内容については、統計処理以外の目的に使用することはありません。
- 集計後の調査票は、責任をもって処分しますので、個人の秘密は守られ、御迷惑がかかることはありません。

◆調査についての問い合わせ先◆

北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課 人材育成・開発グループ 兼 北海道立生涯学習推進センター 担当:松浦、斉藤

TEL: 011-204-5782 FAX: 011-261-7431

「生涯学習」について

この調査における「生涯学習」とは、人々が生涯のいつでも、どこでも、自由に行う学習活動のことで、学 校教育や公民館における社会教育など、自分から進んで行う学習やスポーツ、文化活動、趣味、ボランティア 活動など、さまざまな学習活動のことをいいます。

- 問1 あなたは、この1年くらいの間に「生涯学習」を行いましたか。次の中から1つだけお選びください。
 - 1 生涯学習を行(おこな)った ⇒ 問1-1、問1-2、問1-3へ
 - 2 生涯学習を行(おこな)っていない⇒ 問2へ

[問1で「1 行(おこな)った」と回答された方のみにお聞きします]

- **問1-1** あなたは、その学習活動をどのような場所や形態で行いましたか。次の中からあてはまるものを いくつでも お選びください。
 - 1 公民館や生涯学習センターなどの公的な機関における講座や教室
 - 2 カルチャーセンターやスポーツクラブなど民間の講座や教室、通信教育
 - 3 学校(高等学校、大学、大学院、専門学校など)の公開講座や教室
 - 4 学校(高等学校、大学、大学院、専門学校など)の正規課程
 - 5 職場の教育、研修
 - 6 同好会が自主的に行っている集まり、サークル活動
 - 7 図書館、博物館、美術館
 - 8 テレビやラジオ
 - 9 情報端末やインターネット
 - 10 自宅での学習活動(書籍など)
- 11 ボランティア活動など地域での活動をとおしての学習
- 12 その他(具体的に:

[問1で「1 行(おこな)った」と回答された方のみにお聞きします]

あなたがこの1年くらいの間に行った学習活動について、次の中からあてはまるものをいくつで 問1-2 もお選びください。

- 趣味的なもの(音楽、美術、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など)
- 教養的なもの(文化、歴史、科学、語学など) 2
- 3 社会問題に関するもの(社会・時事、国際、環境など)
- 健康・スポーツ(健康法、医学、栄養、ジョギング、水泳など) 4
- 家庭生活に役立つ技能(料理、洋裁、和裁、編み物など) 5
- 育児・教育(家庭教育、幼児教育、教育問題など) 6
- 7 就職や転職のために必要な知識・技能(就職や転職に関係のある知識の習得や資格の取得など)
- 職業において必要な知識・技能(現在の仕事のスキルアップや仕事に関係のある知識の習得や資格の取得など) 8
- 情報通信分野の知識・技能(SNSの利用の仕方など) 9
- ボランティア活動のために必要な知識・技能 10
- 自然体験や生活体験などの体験活動 11
- 12 その他(具体的に:

[問1で「1 行(おこな)った」と回答された方のみにお聞きします]

あなたは、その学習活動を通じて身につけた知識・技術や経験をどのように生かしていますか。 問1-3 次の<u>①~⑦のそれぞれについて</u>、1~6から<u>1つだけ</u>お選びください。

		生かしている	いる 生かして	言えない	いない えば生かして どちらかと言	生かしていな	わからない
1	仕事や職業で生かしている	1	2	3	4	5	6
2	資格の取得に役立てている	1	2	3	4	5	6
3	まちづくりやボランティア活動などに生かしている	1	2	3	4	5	6
4	子どもたちを育むための活動に生かしている	1	2	3	4	5	6
⑤	他の人(子どもたちを除く)の学習やスポーツ活動、文化活動などの指導に生かしている	1	2	3	4	5	6
6	自分の人生をより豊かにしている	1	2	3	4	5	6
7	自分の健康維持・増進に役立てている	1	2	3	4	5	6

[問1で「2 行(おこな)っていない」と回答された方のみにお聞きします]

学習するのに必要な情報(内容・時間・場所・費用など)が入手できない

この1年間で「生涯学習」を行わなかった理由は何ですか。次の中からあてはまるものを**いくつでも**お 選びください。

- 仕事が忙しくて時間がない
- きっかけがつかめない 3
- 身近なところに学習する場がない
- 7 学習するための費用がかかる
- 一緒に学習する仲間がいない 9
- 11 学習したい内容の講座が開設されていない
- 12 学習しても職場から評価されない
- 13 その他(具体的に:

10

2 特に必要がない

4 家事・育児・介護などが忙しくて時間がない

)

6 時間帯が希望に合わない

学習より優先したいことがある

[問3からは全員お答えください]

問3 あなたは、現在の生活や生きがいについて、どのように感じていますか。次の①・②のそれぞれについ て、1~6から1つだけお選びください。

	とても思う	言えば思う	言えない	思わないと さちらかと	全く思わな	わからない
① あなたは現在の生活に満足していますか。	1	2	3	4	5	6
② あなたは生きがいを感じて生活していますか。	1	2	3	4	5	6

問4 あなたは、お住まいの地域の生涯学習の実態について、どのように思いますか。次の①~ \bigcirc 0のそれぞれ について、1~ \bigcirc 6から1つだけ</u>お選びください。

		とても思う	言えば思う	言えない	思わない と	全く思わな	わからない
1	お住まいの地域には、学習した成果を生かす場や機会が充実していると思う	1	2	3	4	5	6
2	お住まいの地域では、住民が自ら学習に取り組もうとする人 が多いと思う	1	2	3	4	5	6
3	お住まいの地域では、インターネットを活用した学習やそれ を支援する仕組みが充実していると思う	1	2	3	4	5	6
4	お住まいの地域では、役場等の行政機関がNPOやボラン ティア団体と協働した取組を活発に行っていると思う	1	2	3	4	5	6
⑤	お住まいの地域では、自治会・町内会などの活動が活発に行われていると思う	1	2	3	4	5	6
6	お住まいの地域には、子どもたちが多様な体験活動をする場 や機会が多いと思う	1	2	3	4	5	6
7	お住まいの地域では、子どもたちの読書活動が充実していると思う	1	2	3	4	5	6
8	お住まいの地域では、子どもたちが異年齢・異世代と交流する場や心を落ち着けられる居場所が充実していると思う	1	2	3	4	5	6
9	お住まいの地域では、多くの地域住民が子どもたちの活動に 関わりを持っていると思う	1	2	3	4	5	6
10	お住まいの地域では、家庭教育や子育てに関する学習・相談 の機会が充実していると思う	1	2	3	4	5	6

問5 あなたは、日常生活の課題について、どのように捉えていますか。次の①~②のそれぞれについて、1~6から1つだけお選びください。

		である 課題	課題である	言えない	ではない 題	い 題ではな	わからない
1	地球温暖化や自然環境の保全など、環境に関すること	1	2	3	4	5	6
2	安全・安心な食材や望ましい食習慣など、食に関すること	1	2	3	4	5	6
3	異文化の理解や交流など、国際理解に関すること	1	2	3	4	5	6
4	介護や孤独死、地場産業の担い手不足など、超高齢社会に関 すること	1	2	3	4	5	6
⑤	災害の危険性に関する理解や共助体制など、防災に関すること	1	2	3	4	5	6
6	女性の人権尊重や社会進出の促進など、男女平等参画に関すること	1	2	3	4	5	6
7	犯罪や交通事故、疾病など、安全・安心なくらしに関するこ と	1	2	3	4	5	6
8	悪質な販売方法や特殊詐欺など、消費者教育に関すること	1	2	3	4	5	6
9	児童虐待やプライバシーの侵害など、人権に関すること	1	2	3	4	5	6
10	障がい者への配慮など、だれもが暮らしやすいまちづくりに 関すること	1	2	3	4	5	6
11)	ボランティアや地域の活性化など、地域活動に関すること	1	2	3	4	5	6
12	家庭の経済や生活環境、学習機会の格差など、子どもの貧困 に関すること	1	2	3	4	5	6

問6 あなたは、各地域活動やボランティア活動の参加についてどのように考えていますか。次の①~⑤のそれぞれについて、1~5から1つだけお選びください。

参りた 加 [、] こ	し今なし て後いた みは こ	い加 `が加 し今あし た後るた くは こ	た後が加 くももく、 なか加	からない
1	2	3	4	5
動 1	2	3	4	5
動 1	2	3	4	5
自 1	2	3	4	5
な 1	2	3	4	5
	加 `c 1 1 動 1 動 1 合 1 な 1	加、三 みば 三 1 2 動 1 2 動 1 2 自 1 2 な 1 2	加える みは こ くば こ 1 2 3 3 動 1 2 3 動 1 2 3 も 1 2 3 も 1 2 3 も 1 2 3 も 1 2 3 も 1 2 3 も 1 2 3 も 1 2 3 も 1 2 3 も 1 2 3 も 1 3 も 1 2 3 も 1 3	加 こ みは こ くば こ い加 こ 1 2 3 4 動 1 2 3 4 動 1 2 3 4 自 1 2 3 4

問7 多くの人が地域活動や社会活動に参加するようになるためには、どのようなことが必要だと思いますか。この中から<u>いくつでも</u>お選びください。

- 1 地域や社会に関する講習会の開催など、活動への参加につながるようなきっかけづくり
- 2 地域や社会での活動に関する情報提供
- 3 活動の成果が社会的に評価されること
- 4 交通費などの必要経費の支援
- 5 コーディネーターなど、地域や社会での活動を支える人的体制や活動の拠点となる場が整っていること
- 6 わからない
- 7 その他(具体的に

問8 あなたは、機会があれば再び学びたいと思うものはありますか。次の1~16から<u>いくつでも</u>お選びくだ さい。

- 1 日本語による実用的な文章表現やコミュニケーションの方法に関すること
- 2 文学や古典(古文や漢文)の理解に関すること
- 3 日本や世界の歴史・地理に関すること
- 4 法律や政治、経済、国際関係に関すること
- 5 宗教や哲学に関すること
- 6 心理学に関すること
- 7 自然科学や数学に関すること
- 8 健康やスポーツに関すること
- 9 芸術文化(音楽、芸術など)に関すること
- 10 外国語に関すること
- 11 消費生活、衣食住などに関すること
- 12 情報通信分野 (SNSの利用の仕方など) に関すること
- 13 工業技術(情報通信に関するものを除く)に関すること
- 14 農林水産業に関すること
- 15 経営ビジネス(起業、財務会計、マーケティングなど)に関すること
- 16 医療や福祉(子育て、保育、介護など)に関すること

◇最後にあなた自身のことについておたずねします。

■ 市町村名を記入してください。 市町村名 市町村名

■ 性別・職業・年齢の該当する番号に〇印をつけてください。

性別	1. 男 2. 女	職業 1. 学生 2.	会社員・公務員 3.	パート・アルバイト 4. 自営業 5. 無職
年	1. 10歳代	2. 20歳代	3. 30歳代	4. 40歳代
龄	5. 50歳代	6. 60歳代	7. 70歳以上	

■ 「まちづくり」や「むらおこし」などのボランティア団体や、NPO等に所属していますか。

1. はい(団体名:) 2. いいえ

■ 道民カレッジ※の受講生ですか。

1. はい 2. いいえ

※道民カレッジは、北海道知事を学長としており、だれでも、いつでも、入学することができます。また、受講生は学んだことを地域で生かすことができます。

ご協力ありがとうございました。 調査票は市町村の担当者にお渡しください。

ほっかいどう学地方創生塾実施要領

(平成29年1月25日道民カレッジ本部決定)

[一部改正] 平成 29 年 12 月 21 日、平成 31 年 1 月 16 日、令和元年 5 月 31 日、令和 2 年 3 月 13 日

この要領は、「ほっかいどう学地方創生塾」の実施について、必要な事項を定める。

1 目的

- (1) 本事業は、地域の様々な機関や住民等との連携によるワークショップや講演等の実施を通して、地域活動やまちづくりに貢献する人材を育成し、地域の活性化に寄与することを目的とする。
- (2) 課題解決を目指す住民参画型の事業を実証開発し、プロセス・手段とその評価について検証する。

2 内容

本事業は、次に掲げる事項に関して、本事業の実施を希望する市町村(広域を含む)や団体等と調整のうえ、地域活動やまちづくりに貢献する人材を育成するための参画型の講座を実施するものとする。

- (1)参加者や会場の確保
- (2)メイン講師の選定
- (3) 年度計画、各年次計画の作成
- (4) 具体的な内容・プログラム
- (5) 各講座実施後の報告
- (6) 講座終了後の参加者のフォローアップ
- (7) その他、講座の実施に必要な事項

3 募集及び申込み

「ほっかいどう学地方創生塾募集要項」を作成し、「ほっかいどう学地方創生塾」申込書(別紙様式1)により、10月末までに翌年度の実施希望市町村を取りまとめる。

4 開催地の決定

以下の要件を勘案して開催地を決定する。なお、開催地は道内2会場とする。

- (1)参加者は道民カレッジ生、または、地域で活動する意思を持つものであること。
- (2) 講座終了後も継続的に修了者に関わり、地域活動につなげる具体的なビジョンを持っていること。
- (3) 高等教育機関やNPO、民間団体、近隣市町村等とのネットワークを構築しながら実践的な研修の 実施を想定していること。
- (4)事業の効果を高めるために、連続した5回程度(うち講師派遣2回程度、北海道立生涯学習推進センター職員派遣3回程度)の講座を実施すること。
- (5) 事業実施は2年間とし、事業実施後も含めた中・長期的な人材育成計画により実施すること。

5 講座実施後の働きかけ

- (1) 講座終了後、修了者に対して、修了者の関心のある地域活動や専門研修等につながる情報提供を継続する。
- (2) 講座終了後、アンケート等を実施することにより、修了者の活動状況を把握するとともに、修了者への継続的な働きかけが実施されるように支援する。

6 費用の負担

- (1) 会場の借り上げに係る費用は申込者の負担とする。
- (2) 講師及び北海道立生涯学習推進センター職員の派遣に係る費用は北海道立生涯学習推進センターの負担とする。

7 単位認定等

本講座の受講による単位認定は、「学習単位認定及び称号・奨励賞授与等取扱要領」基づき、講座の8 割以上に出席したものを修了者として、ほっかいどう学必修単位4単位を認定する。

- 8 全講座終了後の報告書の作成と各講座実施後の報告
- (1) 申込者は、全講座終了後、「ほっかいどう学地方創生塾」実施報告書(別紙様式2) を作成する。
- (2) 申込者は、各講師派遣講座実施後、実施内容や参加者の取組の様子などを報告する。(別紙様式3)

9 その他

この要領に定めるもののほか、本事業の実施に当たり必要な事項は、本部が別に定める。

附則

- この要領は、平成29年4月1日から施行する。 附則
- この要領は、平成30年4月1日から施行する。 附則
- この要領は、平成31年4月1日から施行する。 附則
- この要領は、令和元年5月31日から施行する。 附則
- この要領は、令和2年4月1日から施行する。

令和2年度 ほっかいどう学地方創生塾開催要項

1 目 的

- (1) 本事業は、地域の様々な機関や住民等との連携によるワークショップや講演等の実施を通して、地域活動やまちづくりに貢献する人材を育成し、地域の活性化に寄与することを目的とする。
- (2) 本事業は、北海道立生涯学習推進センターの調査・研究として、課題解決を目指す住民参画型の事業を実証開発し、プロセス・手段とその評価について検証する。
- 2 主 催 北海道立生涯学習推進センター及び各会場実施団体
- 3 期 日 令和2年(2020年)4月~令和3年(2021年)3月(各会場5回程度)
- 4 内 容 本事業は、次に掲げる事項に関して、実施団体と調整のうえ、地域活動やまちづくりに貢献する人材を育成するための参画型の講座を実施する。
- 5 運 営 者 北海道立生涯学習推進センター、各会場実施団体、 各教育局教育支援課社会教育指導班

6 会 場

	開催日 (予定)	会場	参加対象
鷹栖町	6月~12月	鷹栖地区住民センター	町内在住の高校生、 町内の高等学校に通学する高校生
芦別市	6月~12月	芦別市民会館	市内の高等学校に通学する高校生
網走市	6月~12月	市内コミュニティセンター	町内会、各地区コミュニティセンター 運営委員
伊達市	6月~12月	大滝基幹集落センター	おおたき新聞くらぶ、 地域住民

7 参加人数 各会場 10 名程度

令和3年度(2021年度)ほっかいどう学地方創生塾開催要項

1 目 的

- (1) 本事業は、地域の様々な機関や住民等との連携によるワークショップや講演等の実施を通して、地域活動やまちづくりに貢献する人材を育成し、地域の活性化に寄与することを目的とする。
- (2) 本事業は、北海道立生涯学習推進センターの調査・研究として、課題解決を目指す住民参画型の事業を実証開発し、プロセス・手段とその評価について検証する。
- 2 主 催 北海道立生涯学習推進センター及び各会場実施団体
- 3 期 日 令和3年(2021年)4月~令和4年(2022年)3月(各会場5回程度)
- 4 内 容 本事業は、次に掲げる事項に関して、実施団体と調整のうえ、地域活動やまちづくりに貢献する人材を育成するための参画型の講座を実施する。
- 5 運 営 者 北海道立生涯学習推進センター 各会場実施団体

空知教育局教育支援課社会教育指導班上川教育局教育支援課社会教育指導班

6 会 場

	開催日 (予定)	会場	参加対象
芦別市	5月~12月	芦別市民会館	市内の高等学校に通学する高校生
鷹栖町	5月~12月	鷹栖地区住民センター	町内在住の高校生、 町内の高等学校に通学する高校生

7 参加人数 各会場 10 名程度

<u>学年</u>	氏名

鷹栖町教育委員会高校生プロジェクト~事前アンケート~

この度は、プロジェクトにご参加いただきありがとうございます。本プロジェクトは、地域の様々な団体や世代と連携し、ワークショップや講演などに参加することを通して、自分の未来やマチの未来を考えるとともに、地域における人づくり地域づくりを目的として行う事業です。本事業の効果的な実施、プロジェクトの効果の測定のため、以下のアンケートにご協力くださいますようお願いいたします。

1	「高校生プロジェクト」について現在不安なことや分からないことについてご記入ください。

2 以下の各項目で、現在のあなたの「知識・理解」「意識」などの度合いについて、あてはまる数字に ○をつけてください。

		高い		かや高い		やや低い		低い
(1)	鷹栖町のまちづくりの進め方についての理解	4	_	3	_	2		1
(2)	鷹栖町への愛着の度合い	4	_	3		2		1
(3)	プロジェクト(活動)を進める上で必要なことの知識・理解	4	_	3	_	2	_	1
(4)	このプロジェクトへのあなたのやる気の度合い	4	_	3	_	2		1
(5)	高校生や若い世代がまちの活性化に向けて活動 することが必要だと思う度合い	4	_	3	_	2	_	1
(6)	自分の 10 年後の姿のイメージの完成度	4	_	3	_	2	_	1

<u>学年</u>	氏名

鷹栖町教育委員会高校生プロジェクト~事後アンケート~

この度は、プロジェクトにご参加いただきありがとうございました。本プロジェクトの今後の事業運営に生かすため、以下のアンケートにご協力くださいますようお願いします。

	「高校生プロジェクト」について現在不安なことや分か ください。	·らない	ハこと	<u></u> が解消さ	された	ことに	ついて	∵iii
	以下の各項目で、プロジェクトに参加することによって ったか、その度合いについて、あてはまる数字に〇をつ				識」な	 などが 、	 どの和	 呈度高
		高い		やや高い		やや低い		低い
(1)	鷹栖町のまちづくりの進め方についての理解	4	_	3		2	_	1
(2)	鷹栖町への愛着の度合い	4	_	3	_	2	_	1
(3)	プロジェクト(活動)を進める上で必要なことの知識・理解	4	_	3	_	2	_	1
(4)	このプロジェクトへのあなたのやる気の度合い	4	_	3	_	2	_	1
(5)	高校生や若い世代がまちの活性化に向けて活動 することが必要だと思う度合い	4	_	3	_	2	_	1
(6)	自分の 10 年後の姿のイメージの完成度	4	_	3	_	2		1
-	今回参加して、心に残ったことや心境の変化、これから ご記入ください。	に向け 	ナ て 取 	!り組みた	=b\=		ありま 	: した

芦別市地方創生塾~事前アンケート~

この度は、地方創生塾(探究活動グループ)にご参加いただきありがとうございます。本事業は、地域の様々な団体や世代と連携し、ワークショップや講演などに参加することを通して、自分の未来やマチの未来を考えるとともに、地域における人づくり地域づくりを目的として行う事業です。本事業の効果的な実施、プロジェクトの効果の測定のため、以下のアンケートにご協力くださいますようお願いいたします。

1	地方創生塾について現在不安なことや分からないことについてご記入ください。						
2	リアの夕頂日で	耳左のちたたの	「午口三半 。 1田 6亿)	「辛辣」 がんしん かんかん かんかん かんかん かんかん かんかん かんかん かんかん	などの母合いにっ	117	ちてけまる粉ウ

2 以下の各項目で、現在のあなたの「知識・理解」「意識」などの度合いについて、あてはまる数字に ○をつけてください。

		高い		やや高い		やや低い		低い
(1)	芦別市のまちづくりの進め方についての理解	4		3		2		1
(2)	芦別市への愛着の度合い	4		3	_	2		1
(3)	活動を進める上で必要なことの知識・理解	4	_	3	_	2		1
(4)	この活動へのあなたのやる気の度合い	4		3	_	2		1
(5)	高校生や若い世代がまちの活性化に向けて活動 することが必要だと思う度合い	4	_	3	_	2	_	1
(6)	自分の 10 年後の姿のイメージの完成度	4	_	3	_	2	_	1

芦別市地方創生塾~事後アンケート~

この度は、地方創生塾(探究活動グループ)にご参加いただきありがとうございました。本取組の今後の事業運営に生かすため、以下のアンケートにご協力くださいますようお願いします。

1 :	地方創生塾について現在不安なことや分からないことが	解消;	された	ことにこ	ンいて	ご記入<	くださ	٥١١).
	以下の各項目で、地方創生塾に参加することによって「対していたか、その度合いについて、あてはまる数字に〇をつ				」なる	どが、ど	 の程 _原	安高
		高い		やや高い		やや低い		低い
(1)) 芦別市のまちづくりの進め方についての理解	4	_	3	_	2	_	1
(2)) 芦別市への愛着の度合い	4	_	3	_	2	_	1
(3)) 活動を進める上で必要なことの知識・理解	4	_	3	_	2	_	1
(4)) この活動へのあなたのやる気の度合い	4	_	3	_	2	_	1
(5)) 高校生や若い世代がまちの活性化に向けて活動 することが必要だと思う度合い	4	_	3	_	2	_	1
(6)		4	_	3	_	2	_	1
	今回参加して、心に残ったことや心境の変化、これから ご記入ください。	に向け 	ナて取 	り組みた	<u>-</u>	.となど を 	5りま	こした

令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート(参加者用)

令和 2 年度ほっかいどう学地方創生塾に参加いただき、ありがとうございました。これまでの活動の振り返りのために、本アンケートに御協力くださいますようお願いします。

下記の質問項目について該当する番号に○をつけてください。

① :よく当てはまる ②:少し当てはまる ③:あまり当てはまらない ④:当てはまらない

1 参加の動機について

よく当てはまる

当てはまらない

		,						
(1)	まちのために活動したいと考えたから	1	_	2	_	3	_	4
(2)	仲間がほしかったから	1	_	2	_	3	_	4
(3)	周囲に誘われた・勧められたから	1	_	2	_	3	_	4
(4)	何かしたいと思ったから	1	_	2	_	3	_	4
(5)	その他(具体的に記入)							

2 地方創生塾を通して、「身についた」「向上した」「新たな気付きがあった」ことについて

(1)	自分の考えを的確に相手に伝えること	1	_	2	_	3	_	4
(2)	新たな人間関係をつくること	1	_	2	_	3	_	4
(3)	まちのことを考えること	1	_	2	_	3	_	4
(4)	まちのために活動する意欲	1	_	2	_	3	_	4
(5)	まちをより好きになったこと	1	_	2	_	3	_	4
(6)	その他(具体的に記入)							

3 今後、この講座での学びを生かし、まちのために活動したいと思いますか?

思う ・ 思わない

思う」と回答した方は、	どのようなこ	とをしてみ	タたいですか?
-------------	--------	-------	---------

ありがとうございました。

令和2年度ほっかいどう学地方創生塾事後アンケート(担当者用)

市町村名又は団体名	
記入者名	-
2年間、ほっかいどう学地方創生塾に関わっていただき、ありがと 振り返りのために、下記の視点から御意見をお聞かせください。	うございました。これまでの活動の
1 今年度のプログラム全体(講座の回数も含む)について	
2 学習者(参加者)間の関係づくり(コミュニケーションスキルの	の向上等)について
3 他機関・団体等との連携について	
4 本事業を通した地域活性化について	
5 地方創生塾に参加して良かったことについて	

ありがとうございました。

令和3年度(2021年度)「ほっかいどう学地方創生塾」アンケート

この度は、プロジェクトにご参加いただきありがとうございます。本プロジェクトは、地域の様々な 団体や世代と連携し、ワークショップや講演などへの参加を通して、自分の未来やマチの未来を考える とともに、地域における人づくりや地域づくりを目的として行う事業です。本事業の効果的な実施、プロジェクトの効果の測定のため、アンケートにご協力ください。

アンケート項目は、地域・NPO・企業・行政等と協働するために欠かすことのできない資質・能力を測定するもので、事業終了時にも同様のアンケートを実施します。なお、調査結果は統計的な処理を行い、報告書等で公表する場合は図や表で示すため、個人の情報が特定されることはありません。

1	ご自身についてお書き	きください							
	所属:() 学年:()氏名:()	居住地:()市•町	記入日:(月	日)
2	プロジェクトへ参加す	するに当たっ	ての目標						

3 以下の項目について、現在の自分について、次の5段階(5 よくあてはまる 4 まあまああてはまる 3 どちらでもない 2 あまりあてはまらない 1 まったくあてはまらない)の中から番号を1つ選んで〇で囲んでください

0.0.0						
1	集団で行動するときに先頭に立ってみんなを引っ張っていくことができ る	5	4	3	2	1
2	メンバーに対して的確な指示が出せる	5	4	3	2	1
3	自分が行動を起こすことによって,周りの人を動かすことができる	5	4	3	2	1
4	私は初対面の人でも気軽に話すことができる	5	4	3	2	1
5	自分の意見を相手に伝えることができる	5	4	3	2	1
6	相手の話を積極的に聴く姿勢をとることができる	5	4	3	2	1
7	メンバーに対して,受容的,肯定的な態度をとるよう心掛けている	5	4	3	2	1
8	周囲の人や物事との関係を理解できる	5	4	3	2	1
9	メンバーの失敗に対して責任を持つことができる	5	4	3	2	1
10	自分の置かれた環境・状況をよく理解している	5	4	3	2	1
11	周りの人々の役割と自分の関係をよく認識している	5	4	3	2	1
12	自分に課せられた役割や使命をしっかりと自覚している	5	4	3	2	1
13	何かに取り組む際に,先を見通して計画を立てることができる	5	4	3	2	1
14	取り組むべき課題を明確に分析している	5	4	3	2	1
15	さまざまな情報源から情報を集め、それを活用することができる	5	4	3	2	1
16	数多くの情報の中から、本当に自分に必要な情報を吟味し、手に入れることができる	5	4	3	2	1
17	仕事をするときに, 順序立てて何をどうやって取り組んでいけばよいかを 決めることができる	5	4	3	2	1
18	目標達成の手段・方法を考え確実に進めていくことができる	5	4	3	2	1
19	相手と自分の意見が食い違った場合、相互に有益な妥当点を見出せる	5	4	3	2	1
20	相手の要求を考えて,自分の提案を修正できる	5	4	3	2	1
21	相手と自分の意見が異なっていても、話し合いを重ねる中で意見の折り合いをつけることができる	5	4	3	2	1
22	交渉相手の感情を逆なでせずに、合意の達することができる	5	4	3	2	1
23	相手の要求が自分の意図に反しても,平常心で柔軟に対応できる	5	4	3	2	1
24	論理的に自分の考えを述べ,相手を納得させることができる	5	4	3	2	1
25	相手が納得できるように話すことができる	5	4	3	2	1
26	相手の質問に対して的確に答えることができる	5	4	3	2	1
27	自分のことを理解してもらえるように話すことができる	5	4	3	2	1

本調査研究に関するお問い合わせ

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目「かでる2・7」8階

北海道立生涯学習推進センター

電話 011-204-5782 FAX 011-261-7431

E-mail kensyu@manabi.pref.hokkaido.jp

HP「生涯学習ほっかいどう」

https://manabi.pref.hokkaido.jp/index.html

調査研究報告書(第44号)

令和5年3月発行

編集・発行 北海道立生涯学習推進センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目

電話 011-204-5782